

長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路新築工事に伴います長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成15年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡
長岡京右京第772次調査 (7ANUDC-4・UMD-2・UNW-2地区)
- 2 調査地点所在地 京都市西京区大原野石見町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2003年1月6日～2003年8月6日
- 5 調査面積 約6,030m²
- 6 調査担当職員 吉村正親・南出俊彦・尾藤徳行・大槻明義・大立目一・加納敬二・
布川豊治・上村和直・鎌田泰知・南 孝雄・網 伸也・百瀬正恒
永田宗秀(試掘)・菅田 薫(試掘)
- 7 使用地図 図1は国土地理院発行の1:50,000地形図「京都西南部」をベースに作成した。図2・5は京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「粟生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系(改正前)平面直角座標系(ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度(座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した)
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点(一級基準点)を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 遺構種類別に調査区順から通し番号を付した。
- 13 遺物番号 土器類・石製品・金属製品・木製品に分けて番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・担当調査員
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 作成担当職員 加納敬二・網 伸也・尾藤徳行・大立目一・鎌田泰知・布川豊治・
百瀬正恒・永田宗秀
- 18 執筆分担 永田宗秀:1-(1)
加納敬二:1-(2)、2-(1)-2)、2-(3)、4-(1)
布川豊治:2-(1)-1)
鎌田泰知:2-(1)-3)
尾藤徳行:2-(2)、4-(2) 大立目一:3-(1)・(2)
百瀬正恒:3-(1)の一部
網 伸也:2-(1)～(3)の一部

目 次

1 . 調査経過	1
(1) 試掘調査	2
(2) 発掘調査	4
2 . 遺 構	6
(1) 古墳時代以前の遺構	7
1) 縄文時代	7
2) 弥生時代	7
3) 古墳時代	8
(2) 長岡京期の遺構	13
(3) 平安時代以降の遺構	15
3 . 遺 物	17
(1) 古墳時代以前の遺物	17
1) 縄文時代	17
2) 弥生時代	19
3) 古墳時代	20
(2) 長岡京期の遺物	23
4 . ま と め	27
(1) 古墳時代以前	27
(2) 長岡京期	29

図 版 目 次

図版 1	遺構	調査区配置図 (1 : 1,500)
図版 2	遺構	A 1 ・ 2 区、A 3 区、B 1 区、B 2 区 古墳時代以前平面図 (1 : 400)
図版 3	遺構	A 4 区、A 5 ・ 6 区、B 4 区、B 5 区 古墳時代以前平面図 (1 : 400)
図版 4	遺構	A 7 ・ 8 区 古墳時代以前平面図 (1 : 400) A 3 区東壁、A 4 区東壁 土層断面図 (1 : 100)
図版 5	遺構	A 1 ・ 2 区、A 3 区、B 1 区、B 2 区 長岡京期以降平面図 (1 : 400)
図版 6	遺構	A 4 区、A 5 ・ 6 区、B 4 区、B 5 区 長岡京期以降平面図 (1 : 400)
図版 7	遺構	A 7 ・ 8 区、A 10 ~ 12 区、B 6 区、B 7 区、B 8 区 長岡京期以降平面図 (1 : 400)
図版 8	遺構	A 13 ~ 16 区、B 9 区、B 10 区 長岡京期以降平面図 (1 : 400)

- 図版9 遺構 土壙墓1～3、土器棺墓1～3実測図 縄文時代(1:20)
- 図版10 遺構 竪穴住居2～6・9実測図 古墳時代(1:100)
- 図版11 遺構 建物1・6実測図 長岡京期(1:100)
- 図版12 遺構 建物7・8、柵列3実測図 長岡京期(1:100)
- 図版13 遺物 竪穴住居2出土土器実測図(1:4)
- 図版14 遺物 A区竪穴住居6・7、溝2・3・7、流路1、土壙1・2出土土器実測図(1:4)
- 図版15 遺物 B区竪穴住居9・11～13・15、溝12、遺物包含層出土遺物実測図
(土器1:4、石製品1:6)
- 図版16 遺構 1 遠景 長岡宮を望む(西から)
2 遠景 一条大路南側溝(西から)
- 図版17 遺構 1 A1・2区 全景(西から)
2 A1・2区 土器棺墓1、土壙墓1・2(北から)
3 A1・2区 溝4石包丁出土状況(南西から)
- 図版18 遺構 1 A1・2区 竪穴住居1・2(西から)
2 A1・2区 竪穴住居2 竈と支柱石(西から)
- 図版19 遺構 1 A3区 全景(西から)
2 A3区 土器棺墓2・3(西から)
- 図版20 遺構 1 A3区 竪穴住居3～5(北東から)
2 A3区 建物1(北から)
- 図版21 遺構 1 A4区 全景(東から)
2 A4区 建物3(東から)
- 図版22 遺構 1 A4区 竪穴住居6(南から)
2 A4区 竪穴住居6 竈(東から)
3 A4区 流路1(北東から)
- 図版23 遺構 1 A5・6区 全景(東から)
2 A5・6区 溝7(北から)
3 A5・6区 木棺墓1(北から)
- 図版24 遺構 1 A7・8区 全景(東から)
2 A7・8区 一条大路南側溝(東から)
3 A10～12区 全景(東から)
4 A13～16区 全景(東から)
- 図版25 遺構 1 B1区 古墳時代遺構面全景(西から)
2 B1区 竪穴住居11 竈(北東から)
3 B1区 土壙3(北から)
- 図版26 遺構 1 B1区 長岡京期遺構面全景(西から)

	2	B 2 区	全景 (東から)
図版27 遺構	1	B 4 区	全景 (東から)
	2	B 5 区	全景 (東から)
図版28 遺構	1	B 6 区	全景 (東から)
	2	B 6 区	建物 7 (東から)
	3	B 6 区	井戸 1 (南から)
図版29 遺構	1	B 7 区	全景 (東から)
	2	B 8 区	全景 (東から)
図版30 遺構	1	B 9・10 区	全景 (東から)
	2	B 9 区	建物 8 (北から)
図版31 遺物		縄文土器・弥生土器・石器	
図版32 遺物		A 1・2 区 竪穴住居 2 出土遺物	
図版33 遺物		A 1・2 区、A 4 区、A 5・6 区 出土遺物	
図版34 遺物		長岡京期 出土遺物	

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 50,000)	1
図 2	試掘調査位置図 (1 : 5,000)	2
図 3	試掘調査状況 (東から)	3
図 4	試掘 6 トレンチ 建物跡検出状況	3
図 5	発掘調査前全景 (西から)	4
図 6	発掘調査状況	4
図 7	発掘調査位置図 (1 : 5,000)	5
図 8	竪穴住居 11 ~ 15・溝 12 実測図 (1 : 100)	10
図 9	建物 2・3・5 実測図 (1 : 100)	11
図 10	土壌 3・4 実測図 (1 : 20)	12
図 11	井戸 1 実測図 (1 : 50)	14
図 12	木棺墓 1 実測図 (1 : 40)	15
図 13	縄文土器実測図 (1 : 6)	18
図 14	弥生土器実測図 (1 : 4)	19
図 15	石器実測図 (1 : 2)	19
図 16	井戸 1 出土土器実測図 (1 : 4)	23
図 17	溝 1 出土土器実測図 (1 : 4)	24

図18	遺物包含層出土土器実測図(1:4)	25
図19	鉄製車軸受け金具実測図(1:4)・写真	25
図20	井戸側材実測図(1:20)	26
図21	遺構変遷図(1:1,200)	28
図22	一条大路南側溝の位置・傾斜図	30

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	17

付 表 目 次

付表 1	土壙墓 1・土器棺墓 1～3 出土縄文土器観察表	33
付表 2	流路 1 出土弥生土器観察表	33
付表 3	竪穴住居 2 出土土器観察表	33
付表 4	竪穴住居 6 出土土器観察表	35
付表 5	竪穴住居 7 出土土器観察表	36
付表 6	溝 2・3・7、土壙 1・2、流路 1 出土土器観察表	37
付表 7	竪穴住居 9 出土土器観察表	38
付表 8	竪穴住居 11 出土土器観察表	38
付表 9	竪穴住居 12 出土土器観察表	38
付表 10	竪穴住居 13 出土土器観察表	39
付表 11	竪穴住居 15 出土土器観察表	39
付表 12	溝 12 出土土器観察表	39
付表 13	遺物包含層出土土器観察表	39
付表 14	井戸 1 出土土器観察表	40
付表 15	溝 1 出土土器観察表	40
付表 16	遺物包含層出土土器観察表	40

長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡

1. 調査経過

京都市西京区大原野石見町地内に京都市建設局・街路部街路建設課により、都市計画事業として伏見向日町線の道路建設工事が計画された。当地は、長岡京北西部にあたり、また縄文時代から中世にかけての複合遺跡である上里遺跡¹⁾、古墳時代後期の芝古墳群の範囲にもあたる。さらに北西には旧石器・縄文時代から古墳時代にわたる遺物散布地・集落跡である大原野石見町遺跡が隣接する。そのことから道路建設予定地を対象として、発掘調査を実施することとなった。対象地域は、長岡京市から京都市に続く南北通りの市道3048号線（文化センター通り）から西に分岐する東西通りの農道沿いの水田で、対象面積は約17,500m²におよんだ。対象地が大規模で、また近辺では調査例が少ないことから、発掘調査に先立ち遺跡の残存状況を知ることを主目的に試掘

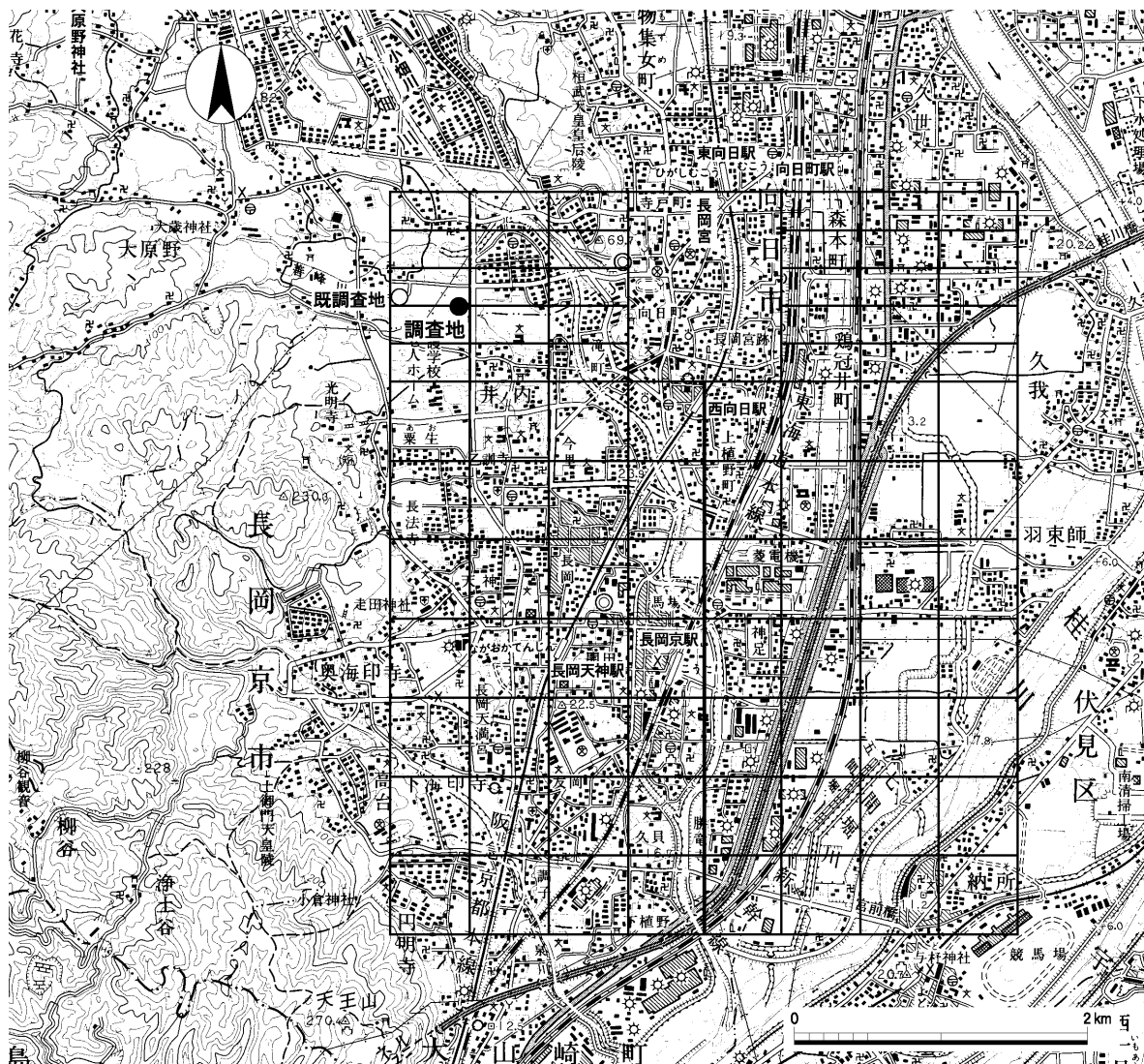


図1 調査位置図 (1 : 50,000)

調査を2001年11月から行った。その調査成果に基づいて調査区を設定し、発掘調査を実施する方針とした。調査地の北西にあたる南北道路・中山石見線建設予定地では、2002年8月から2003年2月に発掘調査(図1)を行い、縄文時代後期から弥生時代前期の流路・湿地状堆積・柱穴、古墳時代前期の流路、長岡京の条坊関連遺構など、各時代の遺構・遺物を検出している²⁾。

(1) 試掘調査

道路建設予定地に15箇所の調査トレンチ(総面積1,482m²)を設定し(図2)、2001年11月26日より2002年1月25日まで試掘調査を実施した。その結果、総数139基の遺構を検出した。以下、トレンチ別に遺構の検出状況を概述し、調査成果をまとめておく。

1 トレンチ 長岡京期から中世の柱穴・土壌・溝など28基を検出した。西側では、長岡京期の整地層を確認した。南西隅で幅1mの古墳時代の溝を北西から南東にかけて総延長で約7m確認している。

2 トレンチ 長岡京期から中世の柱穴14基と溝2条を検出した。

3 トレンチ 長岡京期から中世の柱穴20基と土壌2基を検出した。西側には中世の柵列とみられる小規模な柱穴が並ぶ。

4 トレンチ 長岡京期から中世の柱穴9基、土壌8基と溝1条を検出した。トレンチ西側の中央部分に幅1m、長さ4mで、途切れながらも東西方向に溝状に延びることから、長岡京期の条坊に関連する溝ではないかと考えられる。

5 トレンチ 長岡京期から中世の柱穴36基、土壌1基を検出した。遺構の残存状況は良好である。

6 トレンチ 長岡京期とみられる柱穴16基を検出した。その内西側の柱穴6基は柱当たりが

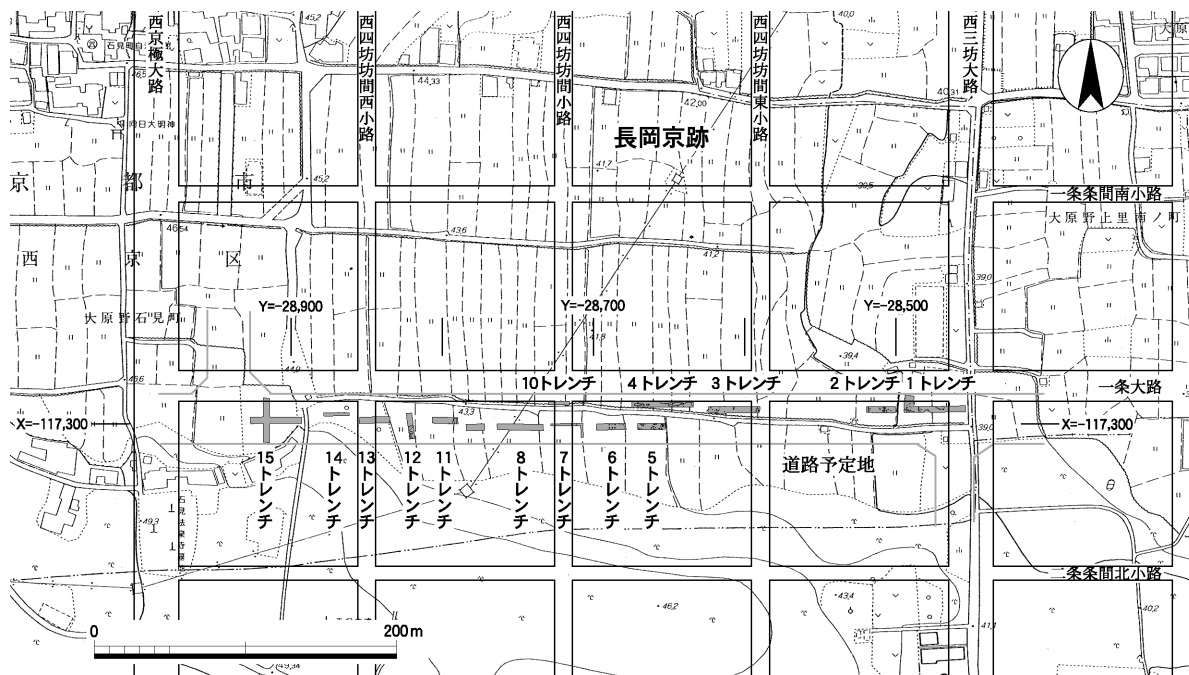


図2 試掘調査位置図(1:5,000)

り、東西2間(3.6m)×南北1間(2.0m)以上の建物とみられ、柱間は南北2.0m、東西1.8mを測る。さらに調査区外の北に延びる。

7トレンチ 明確な遺構は検出できなかった。

8～13トレンチ 土師器・瓦器を含む中世の遺物包含層を確認したが、明確な遺構は確認できなかった。

14トレンチ 基本層序は地表面から約0.1～0.2mの耕土、黄褐色と黒褐色の砂泥が0.3m、以下0.1mの砂礫層となる。現地表下2mまで土層観察のため掘り下げたが、1m以下は流路とみられる灰色粘土と砂層の互層堆積であった。

15トレンチ 中・近世の耕作に伴うとみられる人と牛の足跡を確認したが、その他には顕著な遺構は検出できなかった。基本層序は地表下0.1～0.2mに耕土、0.5mでは黒褐色砂泥の包含層、また近世の暗渠溝が地山まで深く切り込んでいるところが多く、土層全体が攪乱されているところが多かった。

調査結果を以下にまとめておく。

調査地東半部にあたる1～6トレンチでは長岡京期とみられる建物、柵列、溝等の遺構、遺物包含層の残存が良好であった。また、1・2トレンチ周辺では、これまでに旧石器や弥生時代の石核が採取されているが、今回の調査ではその時期の遺物はみられなかった。また、7トレンチから13トレンチの耕作地は中・近世に小規模の水田・畑を整備し、2枚ないし3枚の水田を1枚に統合しているため、各水田の東側部分でかなり厚い盛土がみられた。4トレンチでは一条大路の推定線から南で、断続しながらも東西に延びる溝状遺構を検出した。調査地を二分する東西に走る農道から南側の6トレンチより西側では、旧流路の砂礫が部分的に厚く堆積していたため遺構は稀薄であった。出土遺物は大半が土器類で他には少量の瓦と銭貨がある。土器類のほとんどが包含層から出土したものであるが、縄文時代から中世までであった。それらのことから、6トレンチより東側に長岡京期から中世の遺構・遺物が良好に残存することが判明した。



図3 試掘調査状況



図4 試掘6トレンチ建物跡検出状況

(2) 発掘調査

2002年12月17日、京都市埋蔵文化財調査センター、京都市建設局、当研究所の三者で協議を行った。この協議において、試掘調査の結果から6トレンチより東側においては遺構・遺物の残存密度が高いことが明らかになったので、道路建設対象地の東半分を中心に発掘調査を実施することになった。また、調査に際して各水田の水利慣行の確認と排土置き場の設定、農道・水路などの保全対策・管理などの検討、現場事務所の設置後、2003年1月6日より調査を開始した。まず、掘削重機搬入・大型車両の走行からの農道保全と維持のため鉄板敷設作業を行った後、各調査区を設定した。調査区は東西道路の農道を境に北をA区、南をB区に分けて、A区をさらに1～16区、B区を1～10区に区分したが、後に一部の調査区を統合した。A区でA1・2区、A3区、A4区、A5・6区、A7・8区、A10～12区、A13～16区の7調査区、B区ではB1区、B2区、B4区、B5区、B6区、B7区、B8区、B9区、B10区の9調査区、計16調査区となった(図7)。なお、A9区とB3区については農道・水路保全のため調査区は設定できなかった。

調査では、まず最初に重機で現耕土を排除し、排土は調査区から除外した田・畑に仮置きすることとし、1月14日より全調査区の東端にあたるA1・2区から西へ順次、調査を進めていった。なお、B1・2区の調査については他の調査完了後に実施している。

調査に際しては重機掘削、遺構検出・遺構掘り下げ後、平面・断面図作成、写真撮影などの記録作業を行い、必要に応じて無遺物層を断ち割り、土層堆積状況を調べた。また4月26日と6月21日には現地説明会を行い調査成果を公開している。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳』平成15年版 2003年 では平安時代から室町時代の集落跡となっている。
また、『長岡京市遺跡地図』平成3年版 1991年 では縄文時代から平安時代の集落跡となっている。
- 2) 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年



図5 発掘調査前全景



図6 発掘調査状況

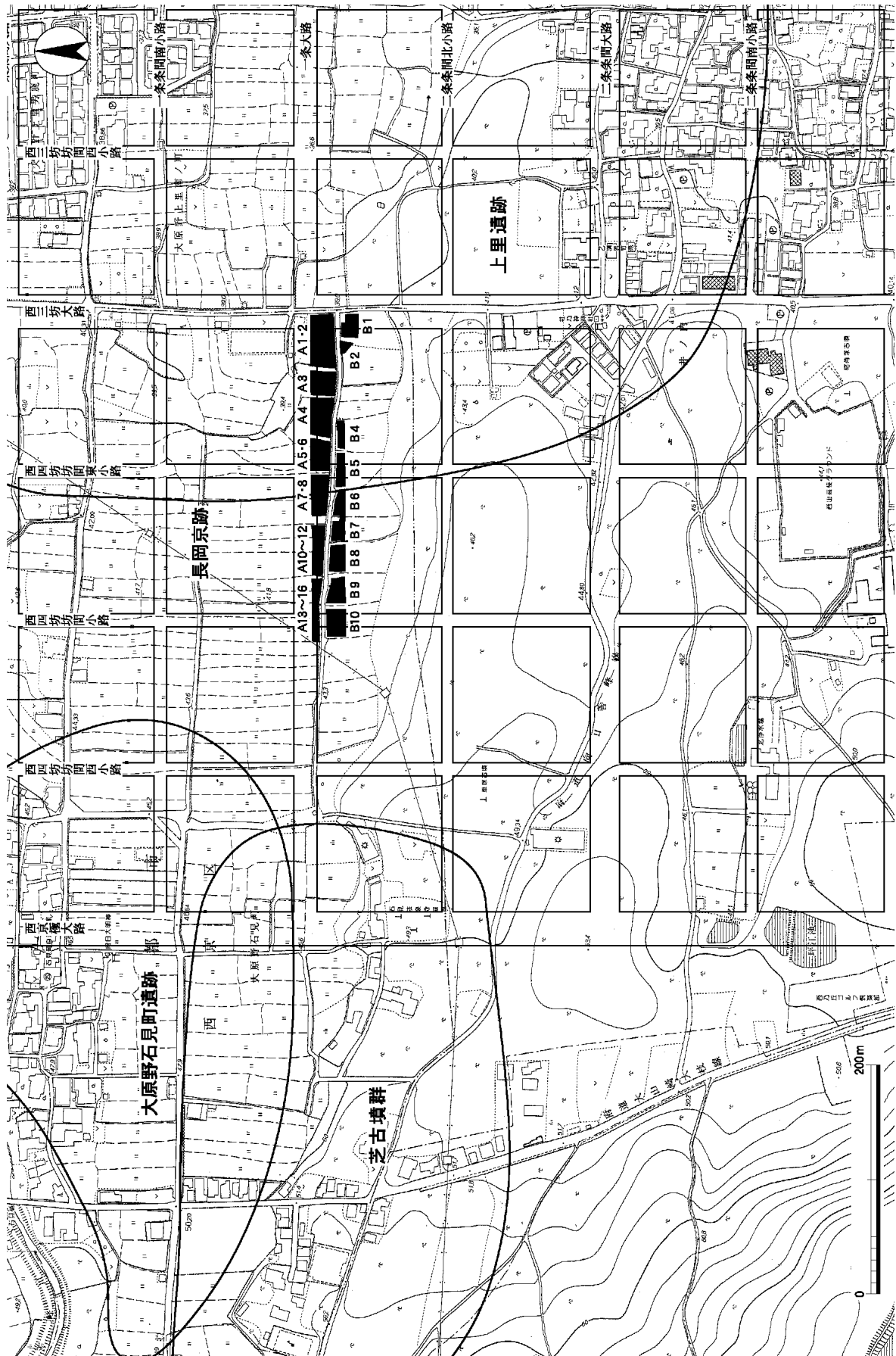


図7 発掘調査位置図(1:5,000)

2. 遺 構

調査地を含む周辺一帯の地形は全体に西から東に緩やかに傾斜している。調査区の最も西にあたるA13～16区の標高は42.2mで、最も東にあたるA1・2区では標高39.2mと約3mの比高差がある。基本層序はA3区の土層断面図(図版4)で示したように、現代耕土層以下に第1層:2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(床土)、第2層:10YR4/6褐色砂泥、第3層:7.5YR3/2黒褐色砂泥、第4層:10YR4/4褐色砂泥である。第1・2層は中世から近世の耕作に伴う堆積土層である。第3層以下は地山である。遺構は第1・2層を除去した第3層の地山面で検出した。

検出した遺構は、縄文時代から中世までであった。主な遺構を時代順にみていくと、縄文時代は晩期の土器棺墓・土壙墓を7基検出した。弥生時代は方形周溝墓1基、溝2条、流路2条。古墳時代は竪穴住居15棟、掘立柱建物3棟、溝7条、土壙4基を検出している。長岡京期は一条大路南側溝(溝1)、西三坊大路西側溝(溝10)・内溝(溝11)、掘立柱建物4棟、井戸1基、木棺墓1基がある。また平安時代以降の掘立柱建物4棟、柵列を検出している。中世は条里坪境に関連する東西溝1条とそれに伴う柵列、他に耕作溝がある。

以下、検出した遺構について、時代順に概述する。なお、遺構平面図(図版2～8)では、古墳時代以前と長岡京期以降に分け図示した。

表1 遺構概要表

調査区	調査面積	縄文時代	弥生時代	古墳時代	長岡京期	平安時代以降
A1・2区	970㎡	土器棺墓1 土壙墓1～3	方形周溝墓1 溝4	竪穴住居1・2 土壙1・2、溝2・3	建物1、溝1	建物9 柵列1・4
A3区	470㎡	土器棺墓2・3 土壙墓4	流路1・2	竪穴住居3～5 建物2、溝2	建物1、溝1	
A4区	640㎡		流路1・2	竪穴住居6～8 建物3、溝5・6	溝1	
A5・6区	440㎡			溝7	溝1、木棺墓1	
A7・8区	530㎡		溝8		溝1	
A10～12区	460㎡				溝1	
A13～16区	360㎡				溝1	
B1区	270㎡			竪穴住居11～15、 土壙3・4、溝12	溝10・11	建物10・11
B2区	50㎡			竪穴住居9・10		建物4、溝9 柵列2
B4区	150㎡		流路1	建物5	建物6	
B5区	230㎡		溝8	溝7		
B6区	210㎡				建物7、井戸1	
B7区	200㎡				柵列3	
B8区	310㎡					
B9区	350㎡				建物8	
B10区	390㎡					
合計	6,030㎡					

(1) 古墳時代以前の遺構

1) 縄文時代

A 1・2区では土器棺墓1と土壙墓1～3を、A 3区では土器棺墓2・3と土壙墓4を検出した。遺物はA 3区土壙墓4を除き、縄文時代晩期後半から末の縄文土器が出土している。

土器棺墓1(図版2・9・17) A 1・2区の西半部南で検出した。掘形は東西・南北約0.8mの大きさで、不整形を呈する。上部は削られており、残存する深さは0.1mである。内には北東から南西方向に深鉢の土器が、押し潰された状態で横たわる。

土器棺墓2(図版2・9・19) A 3区西端で検出した。掘形は土器がようやく入る大きさで、上部は削られており、残る深さは0.2mである。内には壺が口縁部を西方向にして横向きに残る。

土器棺墓3(図版2・9・19) A 3区西端で土器棺墓2に北接して検出した。掘形は東西約0.7m、南北約0.5mの卵形である。深さは0.3m以上。深鉢が口縁部を西方向にして横向きに残る。

土壙墓1(図版2・9・17) A 1・2区の西半部で検出した。掘形は東西約0.9m、南北は古墳時代の溝2に切られて0.5～0.6m残る。深さ約0.35mである。深鉢を含む土器類は、10～20cm大の数個の石と共に出土した。

土壙墓2(図版2・9・17) A 1・2区の西半部で検出した。土壙墓1の北東約1mに位置する。掘形は南北0.65m、東西0.6mの楕円形である。深さは約0.6mである。南肩を古墳時代の溝2に切られている。土器類は、土壙墓1と同様に10～20cm大の数個の石と共に出土した。

土壙墓3(図版2・9) A 1・2区の西半部の南で検出した。掘形は径0.55mの円形を呈している。深さは約0.9mである。深さ0.5m前後に約10～15cm大の石を数石検出した。

土壙墓4(図版2) A 3区西端で検出した。東西約1.4m、南北約0.8～1.0mの不定形である。深さは約0.5m。遺構の平面的位置や遺構内の埋土などから、土器棺墓2・3と一連のものと考えられる。

2) 弥生時代

A 1・2区で方形周溝墓1と溝4を検出した。A 7・8区では東南から西北に流れる溝8を検出している。またB 4区とA 4区では南西から北東に向かって流れる流路1を検出した。また流路1の北で流路2の一部を確認している。

方形周溝墓1(図版2) A 1・2区の北半部で検出した。墓の主体部は削平されていたが、周溝部分が最大幅1.5m、最深0.6mで残存していた。曲折部の深さは0.2mと浅く、直線部の深さが0.6mと深い。周溝内から弥生土器片が出土している。

溝4(図版2・17) A 1・2区の北半部で検出した。最大幅が1.5m、最深0.2mで、方形周溝墓1を巡る。北東隅では溝内から石包丁が出土している。

溝8(図版4) A 7・8区の西半部とB 5区の西端で総延長約33mにわたり検出した。最大幅

が1.4m、最深0.25mで、南東から北西方向に湾曲して流れる溝である。溝内からは弥生土器片が出土している。

流路1（図版2・3・22） A3区・A4区・B4区で総延長約57mにわたり検出した。最大幅が約5.0m、最深が約0.9m。流路内の下層は小・中礫が多量に堆積しており（図版4）南西から北東に流れる。A4区南西部の流路内からは弥生時代後期の弥生土器壺が、ほぼ完形で出土している。

流路2（図版2・3） A3区・A4区で流路1の北で南肩部を検出した。幅約1.7m以上、深さ約0.4m。調査区外の北に延びる。

3）古墳時代

A1・2区～A4区で、竪穴住居1～8と掘立柱建物2・3、溝2・3・5・6、土壇1・2を、B1区では竪穴住居11～15、溝12、土壇3・4を、B2区では竪穴住居9・10を検出した。またA5・6区、B5区では溝7を検出している。B4区で掘立柱建物5を検出した。

竪穴住居1（図版2・18） A1・2区中央部より南西寄りで検出した。竪穴住居2に切られる。傾きは北に対して西へ21°振る。

竪穴住居2（図版2・10・18） A1・2区中央部より南西寄りで検出した隅丸方形の竪穴住居である。竪穴住居1を切る。傾きは北に対して西へ21°振る。幅3.4 × 3.6 で床面積12.24㎡である。主柱穴は4箇所あるが、掘形はいずれも円形で径0.15 の痕跡を残すのみである。北壁中央に馬蹄形で支柱石をもつ竈が造りつけられる。南東隅に掘形が隅丸方形で幅0.5 × 0.4 、深さ0.2 の貯蔵穴をもつ。四壁沿いに断面U字形で幅0.1～0.15 、深さ0.05 の壁溝が巡る。住居内からは古墳時代中期の土器類がまとまって出土している。

竪穴住居3（図版2・10・20） A3区の東南隅の東壁際で検出した方形の竪穴住居である。竪穴住居4を切る。傾きは北に対して西へ35°振る。一辺約5.0m × 5.0mで床面積は25.0㎡と推測できる。主柱穴は南半西の1箇所のみ検出した。掘形は円形で径0.5m、深さ0.4mである。また二辺で断面U字形で幅0.1～0.2m、深さ0.2mの壁溝を検出している。

竪穴住居4（図版2・10・20） A3区の東南で検出した隅丸方形の竪穴住居である。竪穴住居3に切られる。傾きは北に対して西へ30°振る。幅4.2m × 3.8mで床面積は15.96㎡と推測できる。主柱穴は西半の2箇所のみで検出した。掘形は円形で径0.2m、深さ0.1mである。壁溝は検出できなかった。

竪穴住居5（図版2・10・20） A3区の南半で検出した隅丸方形の竪穴住居である。竪穴住居4に隣接している。傾きは北に対して西に32°振る。幅4.3m × 4.5mで床面積は19.35㎡である。主柱穴は4箇所あり、掘形は円形で径0.3～0.4m、深さ0.1mである。四壁沿いに断面U字形で幅0.1～0.2m、深さ0.2mの壁溝が巡る。

竪穴住居6（図版3・10・22） A4区中央部北で一部拡張して検出した隅丸方形の竪穴住居である。傾きは北に対して西へ20°振れる。一辺約6.3 × 6.3 で床面積39.0㎡である。主柱穴

は4箇所あり、掘形は円形と楕円形で径0.4～0.5、深さ0.5である。北壁中央に支柱石をもつ馬蹄形のカマドを造りつけ、南西隅に掘形が楕円形で幅1.4×1.0、深さ0.1の貯蔵穴をもつ。北壁を除く3壁沿いに断面U字形で幅0.15～0.2、深さ0.05の壁溝が巡る。住居内から古墳時代中期の土器類が多く出土している。

竪穴住居7(図版3) A4区西半部で検出したが、削平されており平面での輪郭が不明瞭であった。残存する壁溝の一部から推測して、一辺約5mの方形とみられる。住居内からは古墳時代中期の須恵器杯身・杯蓋が出土している。

竪穴住居8(図版3) A4区西半部で検出した。竪穴住居7に切られる。残存する壁溝の一部から推測して、一辺約4以上の方形竪穴住居とみられる。住居内から古墳時代中期の須恵器片が出土している。

竪穴住居9(図版2・10・26) B2区南端で検出した方形の竪穴住居である。残存状況は不良で北西辺と北東辺の一部を検出した。傾きは北に対して西へ35°振っている。残存幅は3.3m×2.9mで床面積は9.57㎡以上である。北西辺には竈が取り付く。壁溝は竈の南側に一部残存する。竈は灰黄褐色砂泥を積み上げ両袖部を構築しており、中央の船底状で径約0.7mの浅い窪みには、支柱となる円筒状土製品を据え付けていた。

竪穴住居10(図版2・26) B2区の西端で検出した。方形の竪穴住居の北東隅部で大半は調査区外になる。厚さ約0.08mの貼り床と幅約0.2mの壁溝がわずかに残る。

竪穴住居11(図版2・25、図8) B1区北端中央で検出した竪穴住居である。傾きは北に対して東へ約21°振っている。ややいびつな方形を呈し、一辺2.8～3.2mで床面積は約8.0㎡。壁面には壁溝を巡らす。南辺中央やや西よりに竈を造り付ける。柱は当初約1.2mの柱間で中央寄りに建てられ、南東隅には直径約0.8m、深さ約0.2mの貯蔵穴をもつ。建て替えに伴い貯蔵穴は埋められ、柱穴の柱間が南北約1.8m、東西約2mに広げられている。また、竈も当初は円筒形土製品を支柱としていたと思われるが、建て替えに伴い再構築され支柱を石に変え、取り除かれた円筒形土製品は竈の脇の構築材として再利用されていた。

竪穴住居12(図版2・25、図8) B1区の竪穴住居11の南に接して検出した竪穴住居である。傾きは北に対して東へ約12°振っている。東西2.9～3.2m、南北3.4～3.7mの長方形を呈し、床面積は約8.1㎡である。壁面には壁溝を巡らす。やはり南辺西寄りに竈をもつ。床面は2面あり、新しい床面は当初の床面に約0.1mほど貼り床して構築していた。床面の作り替えに伴い竈も構築し直していたが、新段階の竈は長岡京期の溝11に半分以上壊されており構造が明らかでない。旧段階の竈は良好に遺存しており、砥石を割って支柱に転用していた。また、新段階床面には炭が薄く堆積しており、床北西隅には一辺0.5mの隅丸方形を呈する土壌をもち、多量の炭が堆積していた。柱穴は四隅付近に穿たれており、南北約2.2m、東西約2.0mの柱間を持つ。

竪穴住居13(図版2・25、図8) B1区東半部で検出した竪穴住居である。傾きは北に対して東へ約12°振っている。南北2.7m、東西3.0mのややいびつな長方形を呈し、床面積は約8.1㎡である。東辺は竪穴住居15に壊されているが、おそらく竈を持たない竪穴住居である。壁面には

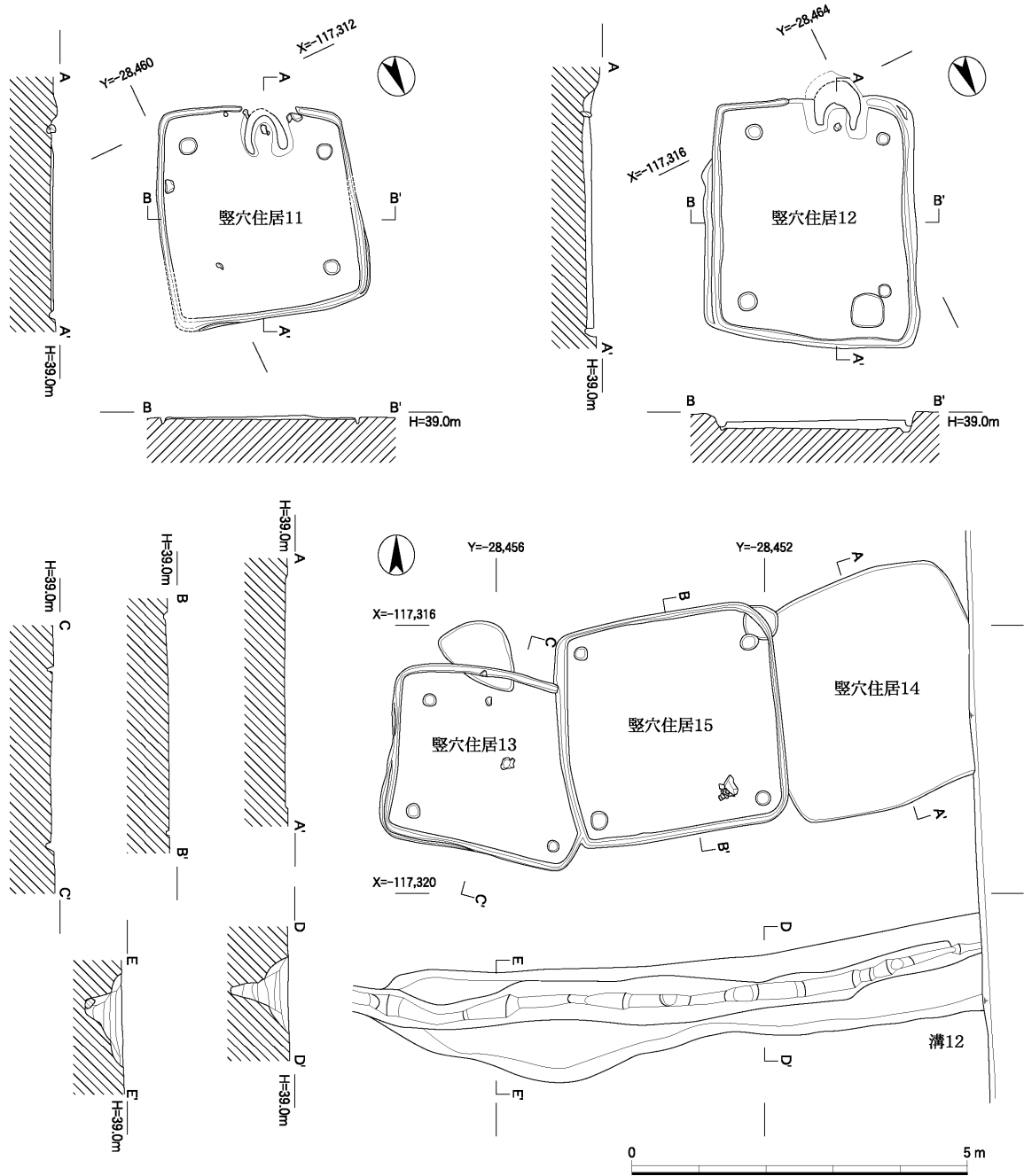


図8 竪穴住居11～15・溝12実測図（1：100）

壁溝を巡らし、四隅コーナー部付近に柱穴をもつ。

竪穴住居14（図版2・25、図8） B1区東端中央部で検出した竪穴住居である。傾きは北に対して西へ約19°振っている。竪穴住居13と同様に竈を持たない竪穴住居で、一辺約3.5mの方形を呈する。西辺を竪穴住居15に壊されているが、復元床面積は約12.3㎡である。

竪穴住居15（図版2・25、図8） B1区東半部で検出した最も新しい時期の竪穴住居である。傾きは北に対して西へ約6°振っている。一辺約3.3mの方形を呈し、床面積は約10.9㎡である。四隅コーナー部付近に柱穴をもつが、竈はもたない。壁面には壁溝を巡らし、南東部に須恵器蓋杯と砥石が据えられていた。これらの蓋杯の型式から、竪穴住居15は他の住居跡より新しく6世

紀後半のものであることがわかる。

建物2（図版2、図9） A3区のほぼ中央で検出した東西2間（4.0m）・南北2間（4.0m）の総柱の掘立柱建物である。床面積は16.0㎡である。傾きは北に対して東へ約30°振る。柱間は2.0mの等間隔である。柱穴掘形は円形で、径0.3～0.4m、深さ0.3mである。

建物3（図版3・21、図9） A4区の北東端で竪穴住居6に西接して検出した。東西2間（4.2m）・南北2間（3.9m）の掘立柱建物である。傾きは北に対して西へ約10°振っている。柱穴掘形は円形で、径0.5～0.7m、深さ0.2～0.4mである。

建物5（図版3・27、図9） B4区北東部で検出した東西2間（4.3m）・南北2間（3.9m）の総柱の掘立柱建物である。床面積は約17.0㎡である。傾きは北に対して東へ約5°振る。柱穴掘形はほぼ円形で、径0.6～0.7、深さ0.3～0.5である。

土壌1（図版2） A1・2区の北端部東で検出した。南北4.0m、東西1.8m、深さ0.6～0.7mの規模で、平面の形状は不定形である。北肩部は調査区外になる。埋土には小礫と炭が多い。埋土から古墳時代の土師器高杯が出土している。

土壌2（図版2） A1・2区の北東隅で検出した。径0.4mの円形で深さが0.1m。溝4と重複する。土壌内からは古墳時代中期の須恵器高杯が出土した。

土壌3（図版2、図10） B1区竪穴住居13の北東で検出した土壌である。当初は直径0.8～0.9m、深さ0.65mの円形土壌であるが、深さ0.3mまで埋めた後に人頭大の石を3個据えて屋外炉として使用している。

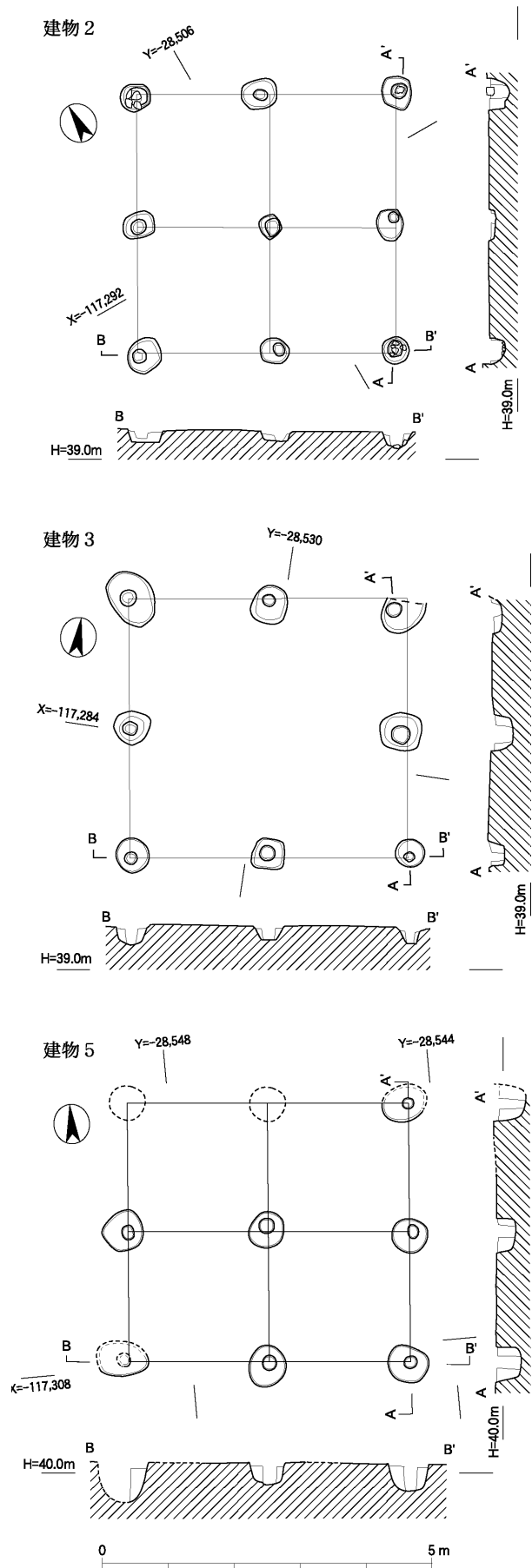


図9 建物2・3・5実測図（1：100）

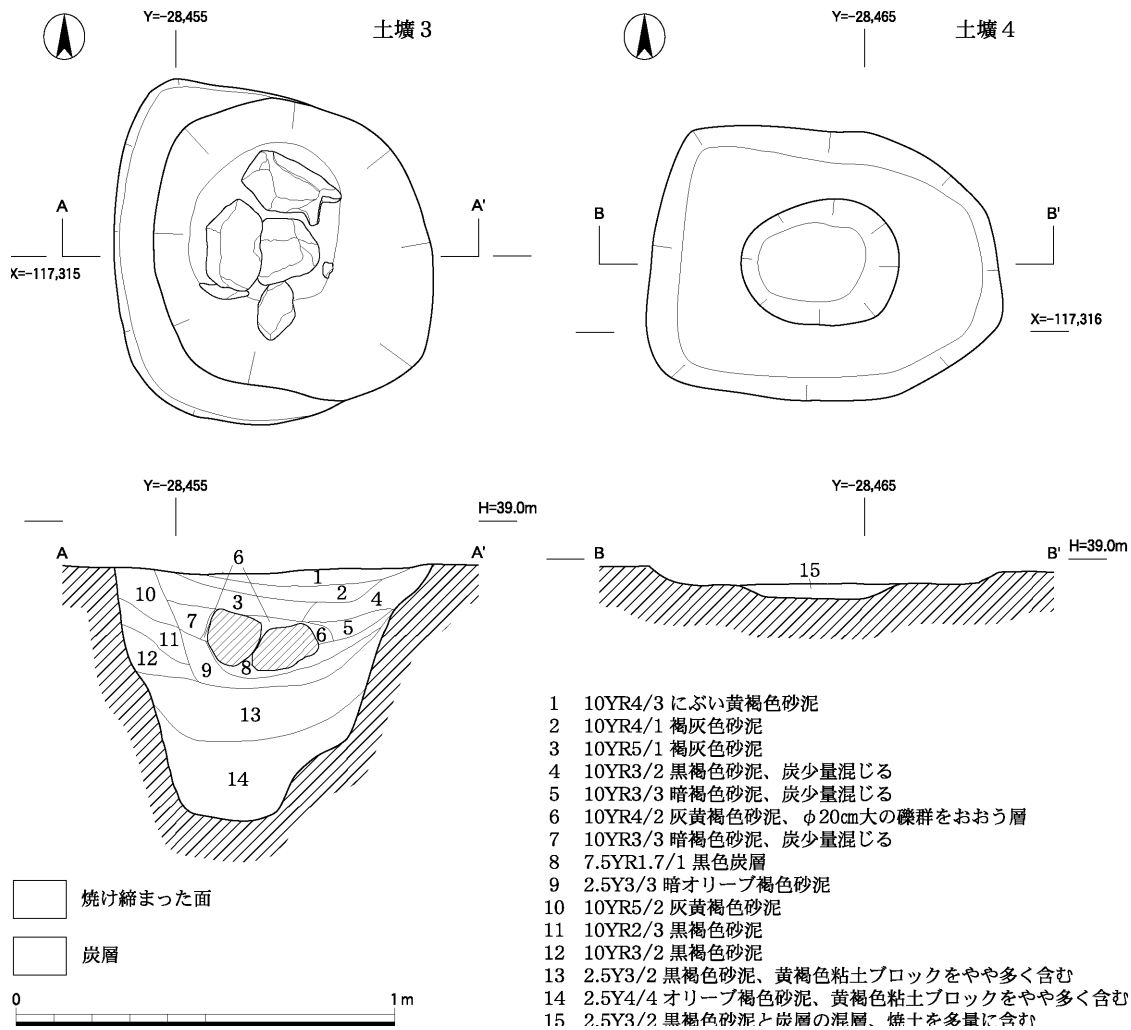


図10 土壌3・4実測図(1:20)

南東部壁面が赤く焼け締まっており、火は北西方向から焚いたことが推測できる。石周辺の底部には多量の炭が堆積していた。

土壌4(図版2、図10) B1区竪穴住居12の南西で検出した土壌である。検出面で東西0.9m、南北0.7mの楕円形を呈し、深さ約0.1mである。底部は直径約0.4mの範囲で焼け締まっており、その上に炭が多量に堆積していた。屋外炉として機能したと考えられる。

溝2(図版2) A1・2区からA3区にかけて総延長約50mにわたり検出した。溝の方向は南東から北西へ一直線に延びる。断面が逆台形で幅0.4m、深さは最深0.6mである。溝内からは古墳時代中期の土器類が多く出土した。

溝3(図版2) A1・2区の西半部で延長約20mにわたり検出した南北方向の溝である。断面はV字形で幅1m、深さ0.6mである。さらに調査区外の北と南東に延びる。溝内からは古墳時代中期の須恵器が出土した。

溝5(図版3) A4区東端で延長約21mにわたり検出した南北方向の溝である。断面がU字形で幅0.5m、深さ0.6mである。さらに調査区外の北と南に延びる。

溝6(図版3) A4区東半部で延長約14mにわたり検出した南北方向の溝である。断面が逆台

形で幅0.6m、深さ0.3mである。南は途切れているが、北へは調査区外に延びる。

溝7（図版3・23） B5区からA5・6区へ流れる南北方向の溝で、総延長約32mにわたり検出した。最大幅は1.9m、最深0.7m。断面の形状は逆台形である。溝内から古墳時代中期の土器類が出土している。

溝12（図版2、図8） B1区竪穴住居群の南に接して、弧を描く東西溝である。最大幅約1.5m、最深0.85m。東半部の残りが良く、断面が漏斗状を呈しており、堆積状況から2時期の変遷が想定できる。当初、断面U字形の浅い溝であったのが、後に幅が狭くて深い溝に再掘削されたようである。底部は連続した土壌のように激しい凹凸がみられるが、これは掘削の単位と考えられる。竪穴住居群の南限を区画する溝であろう。

（2）長岡京期の遺構

A地区の全調査区で総延長約270mにわたり一条大路南側溝と考えられる溝1を検出した。またB1区では西三坊大路西側溝・内溝とみられる溝10・11を検出している。建物は4棟検出しており、いずれも掘立柱建物である。B6区では建物に伴う井戸も検出した。またA5・6区の一条大路南側溝の南で木棺墓1を検出している。

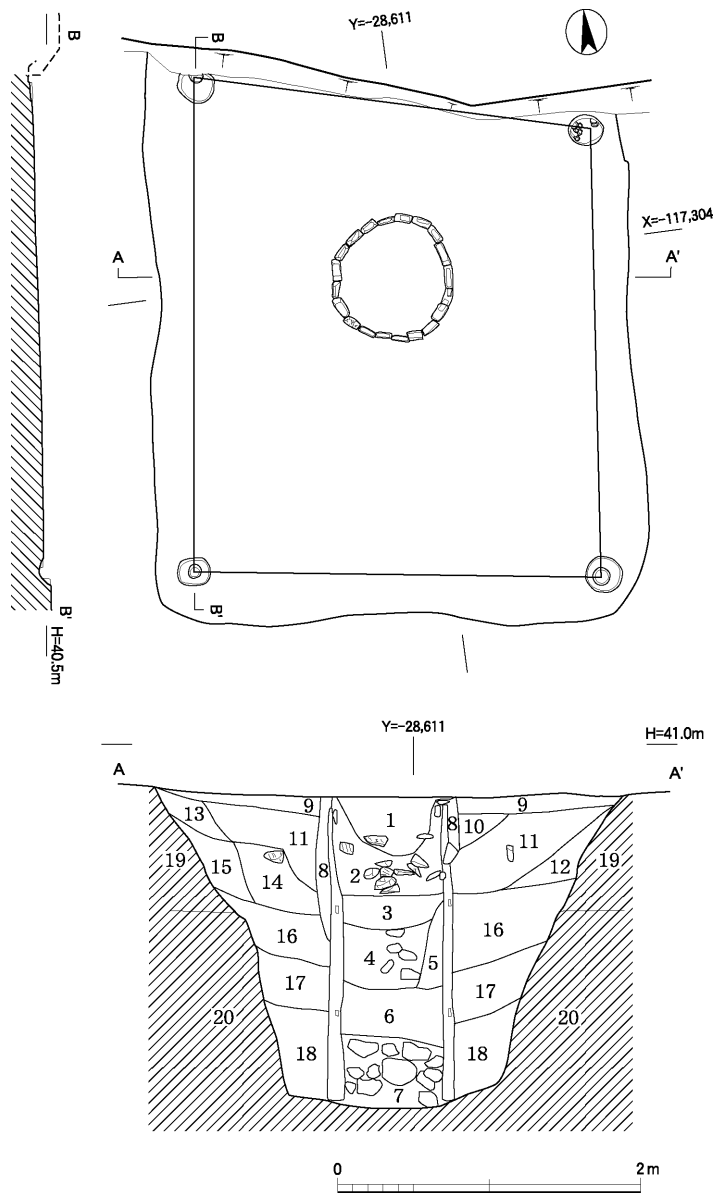
建物1（図版5・11・20） A1・2区からA3区にまたがって検出した。東西3間（7.2m）・南北2間（5.5m）で、北庇が付く東西棟である。身舎の柱穴掘形は隅丸方形（一辺0.5～0.6m、最深0.5m）、桁行方向の柱間は2.7m等間、梁間方向の柱間は2.4m等間である。北庇の出は2.6mである。建物方向は北に対し1°21′ 東に振れる。

建物6（図版6・11・27） B4区で検出した東西2間（5.1m）・南北2間（5.2m）以上、東庇が付く南北棟である。身舎の柱穴掘形は隅丸方形（一辺約0.9m、最深0.7m）で、柱穴は径約0.3m。桁行方向の柱間は2.6m等間、2間北側では柱穴を検出できなかったことから、北側に1間分は延びるものと考えられる。梁間方向の柱間は西から2.5m、2.6mである。東庇の出は2.1mである。建物方向は北に対し0°22′ 東に振れる。

建物7（図版7・12・28） B6区で検出した東西5間（12.5m）・南北1間（2.7m）以上、北庇が付く東西棟である。身舎の柱穴掘形は隅丸方形（一辺0.8m、最深0.5m）で、柱穴は径約0.3mである。桁行方向の柱間は2.5m等間、北庇の出は2.7mである。身舎は調査区外の南に延びる。建物方向は北に対し0°48′ 東に振れる。

建物8（図版8・12・30） B9区で検出した東西2間（3.6m）・南北3間（6.0m）以上の南北棟である。柱穴掘形は不定形（一辺0.5m、最深0.3m）で、柱穴は径約0.2mである。桁行方向の柱間は2.0m等間隔、梁間方向の柱間は1.8m等間である。さらに調査区外の北に延びる。建物方向は北に対し0°49′ 西に振れる。

井戸1（図版7・28、図11） B6区建物7の北東約5mで検出した円形縦板組柄留めの井戸である。井戸の直径は外径約0.9m、内径0.7mで深さ2.1mを測る。断面を台形に加工した20枚の杉板材を縦方向に組み、隣り合う縦板材に上下2ヶ所の柄穴をあげ、太柄（だぼ）と呼ばれる木



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1 褐色砂泥、φ10cm大の混礫 | 11 暗褐色砂泥、19層の地山混 |
| 2 褐灰色粘土、砂混、φ10cm大の礫混多い | 12 褐灰色粘土、粗砂・19層の地山混 |
| 3 灰色粘土、薄板片多い | 13 灰黄褐色粘土、粗砂・炭・19層の地山混 |
| 4 灰色粘土、φ10cm大の礫混多い | 14 暗オリーブ灰色粘土 |
| 5 灰色粘土、砂混 | 15 褐色粗砂礫、φ~3cm、泥砂混 |
| 6 灰色粘土 | 16 暗灰色+灰色粘土、薄板片混 |
| 7 灰色礫 | 17 暗灰色+灰色粘土 |
| 8 褐灰色粘土 | 18 オリーブ灰色粗砂、粘土混 |
| 9 にぶい黄褐色砂泥 | 19 暗褐色砂泥（地山） |
| 10 灰黄褐色粘土、砂混 | 20 オリーブ灰色砂礫（地山） |

図11 井戸1実測図(1:50)

る。溝心の座標値は、A 1・2区の東端はX=-117,284、Y=-28,460で、A 13~16区の西端ではX=-117,283.85、Y=-28,733.10で、一条大路南側溝と考えられる。またA 7・8区では、この溝から鉄製の車軸受け金具が長岡京の土器と共に出土している。

溝10(図版5) B 1区の調査区中央で南北約15mにわたり検出した。検出面での幅は約1.7~

製部材でとめ、平面が円形の井戸側を構築している。

井戸掘形は、南北4m・東西3mの長方形である。掘形の四隅では柱穴を検出しており、覆屋が構築されていたとみられる。柱穴は径約0.2m、深さ約0.3m。柱間は2.7~3.3mと不揃いである。井戸内の埋土下層からは長岡京期の土器類がまとめて出土している。

柵列3(図版7・12) B 7区で検出した柵列。検出長は南北2間(4.8m)、東西1間(2.4m)のL字状に折曲する柵列と、東西1間(2.4m)の柵列である。柱穴掘形は隅丸方形(一辺0.3~0.4m、最深0.3m)で、柱間は2.4m等間である。東西に折曲する間は4.0mで、その間は出入口と考えられる。

溝1(図版5~8・16・24) A区の全域で総延長約270mにわたり検出した東西溝である。断面は浅いU字形で、最大幅は1.7m、最深0.35mである。埋土は上層が褐色砂泥、下層が褐灰色砂泥である(図版4)。溝の底部標高は、A 1・2区の東側で38.78m、A 13~16区の西端で41.90mで、比高差が3.12mあり、西から東にゆるやかに流れていたことがわかる。

1.8mで、底部の東端と西端が約0.4～0.6mの幅でさらに溝状に深くなっていた。深さは浅いところで0.1m、深いところで0.3mあり、底部標高は南端で38.85m、北端で38.65mで南から北へ緩やかに傾斜している。断面を観察すると、砂を多く含んだ褐灰色から黒褐色の砂泥が2時期の変遷で堆積しており、最初は溝底部の西側を水が流れていたが、後に東側を流れるようになったことが確認できる。この2時期の変遷が溝底部の2条の溝に現れている。溝心の座標値は南端のX=-117,323でY=-28,458.25、北端のX=-117,309でY=-28,458.55で、西三坊大路の西側溝に相当すると考えられる。

溝11（図版5） B1区の溝10と平行して南北に延びる幅2.5～3.0mの南北溝である。溝の東肩と溝10西肩の距離は約2.5mで、この間に築地が設けられていたとみられる。溝心の座標値はX=-117,323でY=-28,463.1、X=-117,309でY=-28,462.7である。深さは約0.2mである。この溝からは長岡京期の土器片が多く出土している。

木棺墓1（図版6・23、図12） A5・6区一条大路南側溝の南接地で検出した。掘形は南北約2.0m、東西約0.7mの長方形で北辺・南辺はやや丸くなる。方向は北でわずかに東偏する。

深さ約0.2mである。木棺は側板が2枚、両側に残る。ともに長さ約1.4m、幅約0.1m、厚約0.03m。底に木片が残存しており、長さが約0.35m、幅約0.04m、厚さ約0.5cm。副葬品は出土しなかったが、埋土から土師器小片が数片出土している。

（3）平安時代以降の遺構

A1・2区で建物9と柵列1・4、B1区・B2区では建物4・10・11、溝9、柵列2を検出した。建物はいずれも掘立柱建物で、検出状況や方位から平安時代と考えられる。B2区北端で検出した東西方向の溝9とそれに伴う柵列2については中世とみられる。

建物4（図版5） B2区西端で検出した東西1間（1.7m）以上・南北1間（2.0m）以上の建物である。建物の北東隅を確認したにとどまり、柱掘形は約0.4mの隅丸方形で、柱径は0.15～0.2mである。全容は明らかでない。建物方向は北に対して1°東に振れる。

建物9（図版5） A1・2区で検出した東西3間（5.4m）・南北1間（2.3m）以上の建物。柱穴掘形は一辺0.4～0.5mの方形で、柱穴は径約0.3mである。桁行方向の柱間は1.8m等間で、梁間方向の柱間は2.5mである。建物南半部は中世の耕作溝に削平を受けているため不明。建物方向は北に対し1°23'東に振れる。

建物10（図版5） B1区北東の西三坊大路の路面上で検出した。東西2間（4.3m）・南北2

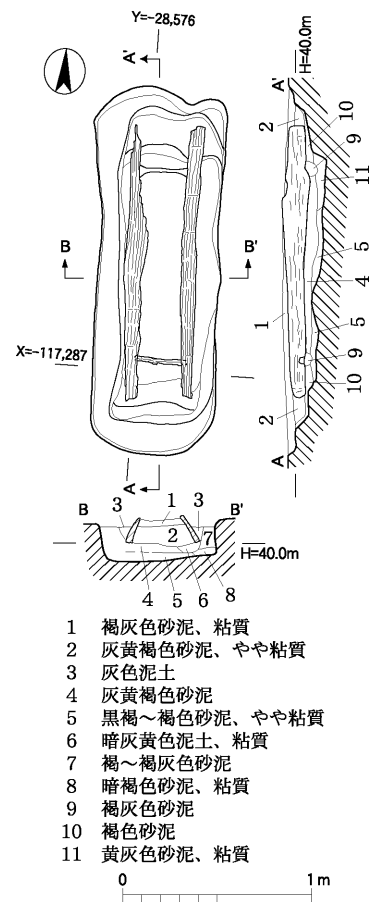


図12 木棺墓1実測図(1:40)

間（4.3m）の建物である。桁行方向の柱間は西から2.1mと2.2m、梁間方向の柱間は東側が2m、西側が1.9mと不揃いである。柱の掘形は一辺が約0.4mの隅丸方形で、柱径は0.15～0.2mである。建物方向は北に対し東に1°5′振れる。

建物11（図版5） B1区北端で溝11を切って検出した。南側の柱列3間分（5.7m）を検出しており、建物は調査区外の北に延びる。柱間は1.8m、2.1m、1.8mである。柱掘形は一辺が約0.4mの隅丸方形で、柱径は0.15～0.2mである。1間目の柱穴は根石をもつ。建物方位は北に対し東に1°振れる。

溝9（図版5） B2区で検出した西から東に流れる東西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.12m。埋土は灰黄褐色粘土で、瓦器・土師器片などが出土した。

柵列1（図版5） A1・2区で検出した東西方向の柵列。東西約22mにわたり検出した。柱穴の間隔は不揃いで、2.0mと4.0mを測る。柱穴は径が0.3～0.5mの円形。

柵列2（図版5） B2区の溝9南に接して検出した東西方向の柵列。東西3間分を確認した。柱穴径が0.2～0.3m、柱間は1.3～1.4mとばらつく。埋土が溝9と同一の灰黄褐色粘土である。

柵列4（図版5） A1・2区の西端部で検出した南北方向の2列の柵列。西・東側ともに柱穴は径0.2～0.3m、柱間は1.5mと1.0mである。埋土はいずれも茶褐色粘土。

3. 遺物

出土した遺物は、土器類が中心で縄文時代から鎌倉時代のものがある。なかでも古墳時代の土器類が多くを占める。ここでは古墳時代以前と長岡京期に大別し、出土した主要な遺物について概述する。

(1) 古墳時代以前の遺物

1) 縄文時代

A 1・2区、A 3区で検出した土器棺墓・土壙墓からは縄文時代晩期とみられる深鉢・甕・壺が出土している。A 1・2区の土器棺墓1・土壙墓1～3から出土した縄文土器とA 3区の土器棺墓2・3から出土した土器には新旧がみられ、前者は縄文時代晩期中頃から後半で、後者は晩期末の特徴がみられる。¹⁾

縄文土器（図版31、図13、付表1 1～4）

深鉢（1）は、A 1・2区土壙墓1から出土した。口縁端部の近くに1条の突帯を貼り付け、D字型の刻目がつけられている。長い口縁部はいったん直立気味に延び、外反して端部にいたる。

表2 遺物概要表

	時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
A区	縄文時代	縄文土器	5箱	縄文土器4点	5箱	0箱
	弥生時代	弥生土器	1箱	弥生土器1点、石鏃2点、石刃1点、石包丁1点	1箱	0箱
	古墳時代	須恵器、土師器	45箱	須恵器45点、土師器2点	29箱	16箱
	長岡京期	須恵器、土師器	23箱	須恵器5点、土師器5点、鉄製品1点	7箱	16箱
	鎌倉時代～室町時代	須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶磁器、輸入陶磁器	1箱		0箱	1箱
	計		83箱	67点（8箱）	42箱	33箱
B区	古墳時代	須恵器、土師器	9箱	須恵器20点、土師器1点、土製品1点、石製品2点	8箱	0箱
	長岡京期	須恵器、土師器、井戸側材	3箱	土師器4点、須恵器3点、井戸側材2点	3箱	0箱
	鎌倉時代～室町時代	瓦器	1箱		0箱	0箱
	計		14箱	33点（2箱）	11箱	1箱
合計		97箱	100点（10箱）	53箱	34箱	

コンテナ箱数の合計は、遺物の整理作業を行ったため、出土時より多くなっている。

体部と口縁部には明瞭な境ができる。口縁部外面は水平方向のナデで調整し、体部外面は調整による条痕が残る。内面は横方向のナデで調整している。突帯は口縁部の調整後に貼り付けられ刻み目を施す。また口縁上端面にも刻目が施される。胎土の色調は外面は淡い褐色で、内面は黒褐色を呈している。胎土は粗く石英、長石、角閃石、雲母などの石粒を含む。晩期後半にあたる滋賀里 式に比定される。

深鉢(2)は、A1・2区土器棺墓1から出土した。形状はいわゆる砲弾型で、口縁端部から少し下がった位置に突帯を1条貼り付け、D字型の刻目がつけられている。体部外面は下から上にケズリ上げ、口縁部付近では横方向にケズリで調整している。内面は横方向にナデで調整している。胎土の色調は内外面ともに灰白色を呈している。胎土は粗く、石英、長石、チャート、などの石粒や赤褐色粒子を含む。晩期後半にあたる船橋式に比定される。

深鉢(3)は、A3区土器棺墓3から出土した。口縁端部に接して1条の突帯を貼り付け、小さなO字型の刻目をつける。さらに体部と口縁部の境目に1条の突帯を貼り付け、O字型の刻目

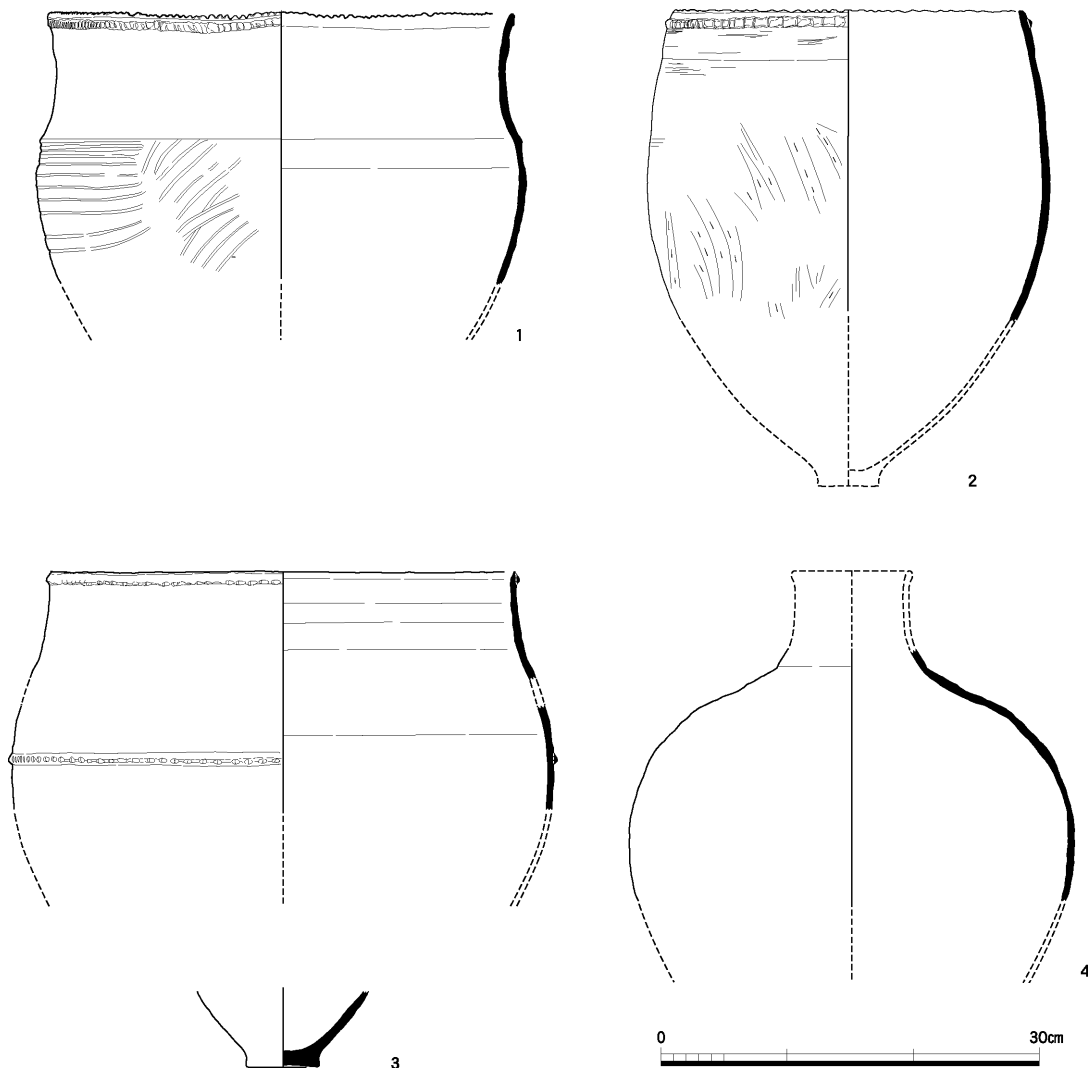


図13 縄文土器実測図(1:6)

をつける。口縁部外面は横方向のナデで調整している。体部は欠損しているが下から上にケズるタイプとみられる。底部は同一個体とみられる平底が残存していた。胎土の色調は内外面ともに灰黄褐色を呈している。胎土は粗く、石英、長石、角閃石などの石粒を含む。晩期末にあたる長原式に比定される。

壺(4)は、A3区土器棺墓2から出土したもので、口縁部近くと体部が残る。口縁部は直立し、底部は平底のタイプとみられる。磨滅が著しく調整手法などは不明である。胎土の色調は内外面ともに褐灰色で、胎土には石英、長石などの石粒を多く含む。晩期末にあたる長原式に比定される。

2) 弥生時代

A4区流路1から後期の長頸壺と、A1・2区溝4から石包丁が、また他の遺構からは石鏃などが出土している。

弥生土器(図版31、図14、附表2 5)

長頸壺(5)は、A4区流路1から出土した。口縁部は外上方に広がる。頸部と胴部の境の屈曲が鈍い。頸部と胴部の境外面には粗いハケ目が残る。胴部下半にタテ・ナメ方向のタタキもみられる。内面底部から体部にかけてはハケによる調整を施す。また肩部にヘラ描きの記号が付く。後期にあたる畿内第 様式に比定される。

石器(図版31、図15 石1~4)

石鏃(石1)は、A3区竪穴住居5から出土した。ほぼ完形である。最大長2.2cm、最大幅1.7cm、厚さは0.2cmである。重さは0.62gを測る。安山岩製。縄文時代の可能性がある。

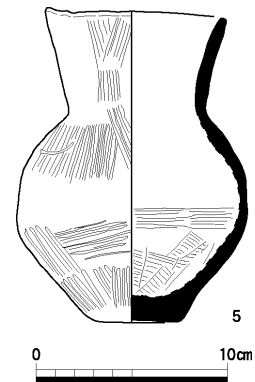


図14 弥生土器実測図(1:4)

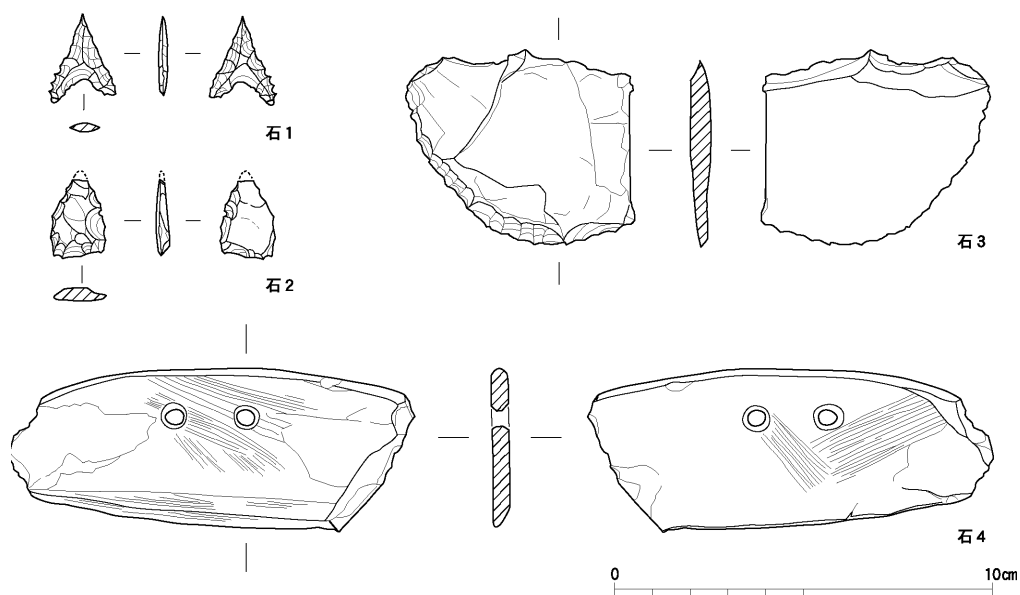


図15 石器実測図(1:2)

石鏃（石2）は、A4区耕作溝から出土した。先端と基部が破損しており、残存長は2.1cm、最大幅は1.4cm、厚さは0.4cm。重さは1.1である。サヌカイト製とみられる。

剥片（石3）は、A3区遺物包含層から出土した。刃部のある剥片で、残存長6.0cm、厚さ0.6cm。重さは37.6。チャート製。

石包丁（石4）は、A1・2区溝4から出土した。残存長が10.7cm、幅は4.3cm、厚さ0.4cmである。石包丁に施された穿孔は両面からである。形態は直刃で、材質は粘板岩とみられる。

3) 古墳時代

竪穴住居・溝からは中期にあたる5世紀後半～6世紀初頭の須恵器杯蓋・杯身・高杯・甗・壺・甕、土師器壺・甕・甑などの遺物が出土した。その中でもA1・2区竪穴住居2、A4区竪穴住居6から出土した遺物は、出土量・内容ともに豊富で、一括性も高く重要である。またA1・2区からA3区にまたがる東西方向の溝2からも須恵器甕を中心にまとめて出土している。その他に注目される遺物としては、A1・2区竪穴住居2からは、京都府下でも出土例が少ない、把手付小椀（図版13-22）が出土している。以下、古墳時代の遺物について概述する。

竪穴住居2出土土器（図版13・32、付表3 6～30）

須恵器 総数は333片あり、内容は杯・蓋55.5%、高杯9.6%、甗7.8%、壺0.3%、椀1.8%、甕13.0%、不明12.0%である。主に覆土から出土し、床面から出土は（13・14）がある。多数を占める杯身（15～20）の法量は口径10.2cm、器高5.4cmが平均値、立ち上がり高の平均値は1.8cmを測る。杯蓋（6～14）の法量は口径11.9cm、器高4.8cmの平均値を測る。形態は杯身の底体部が平坦気味なもの、丸みを持つものがある。杯蓋も天井部が平坦気味になるもの、丸みを持つものがある。これら図示した須恵器は陶邑編年の時期区分から、²⁾5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式～期TK-47型式に比定される。また、特記すべき遺物として覆土から出土した把手の付く椀（22）がある。5世紀中葉の期TK-216型式の範疇に属する。近隣の出土例では、長岡京市今里の今里遺跡から出土している。³⁾

土師器 甕・甑が出土している。甕（25）は口径14.0cmを測るが、下半は欠損しており器高は不明である。赤褐色の胎土で長石・雲母を含む。形態は口縁部が短く外反し丸くおさまり、丸みを持った体部を持つものである。全体に磨滅しているが、内面にナデ調整の痕跡を残す。甕（26）は口径14.0cmを測る。下半部は欠損しており器高は不明。鈍い黄褐色の胎土を呈し、チャート・長石を多分に含む。形態は頸部から屈曲し、内弯気味に上方に伸びる口縁部を持つ。調整は外面ハケ目、内面はケズリが施される。布留式土器甕の形態を引き継ぐものである。甑（27）の体部上半は直線的に立ち上がり、口縁端部は断面三角形状で内傾する。甑（28）は緩やかに内弯しながら上半部は直線的に立ち上がり、内傾気味に丸くおさまる。中位には把手が付く。どちらも下部が欠損し、磨滅が激しく調整痕は観察できなかった。

土製品 把手（29）は甑か鍋の把手部に当たるものである。土製支脚（30）は焚口付近から出土した。竈内に据え置かれる支脚と推定する土製品の体部片である。形態は円筒形を呈し、径は

10cm強を測る。この類例は、近隣では今里遺跡からのものがある⁴⁾。

竪穴住居6出土土器(図版14・33、付表4 31~39)

床面と貯蔵穴から出土した。須恵器の総数は143片あり、内容は杯・蓋57.4%、高杯5.0%、壺1.0%、甕33.6%、不明3.0%である。有蓋高杯の蓋(31~33)は器高が高く、天井部に丸みをもつものと、器高が低く、天井部が平坦なものがある。杯蓋(34~37)は天井部が平坦気味になるものがみられる。杯身(38)の底体部も丸みをおびながらも平坦気味である。他には外反した直線的な口縁部と口縁下端に突帯を持つ甕(39)がある。これらは5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式~期TK-47型式に比定されるが、(31)など古相を示すものもある。須恵器以外には土師器甕、甑が出土しているが、少量で細片のため図示できなかった。

竪穴住居7出土土器(図版14・33、付表5 40・41)

須恵器の出土量は竪穴住居2・6に比較すると少量である。床面出土の杯蓋(40)は天井部が若干の歪な丸みをもつ。杯身(41)は平坦な底部をもつ。他には甕・甕・高杯が出土している。他には土師器甕があるが、細片のため図示できなかった。年代は5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式~期TK-47型式に比定される。

溝2出土土器(図版14・33、付表6 42・43・49・50)

須恵器杯身(42)・甕(43)・甕(49・50)が出土している。他には土師器(甕・甑)製塩土器がある。これらの土器類は5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式~期TK-47型式に、甕については期の6世紀代に比定される。

溝3出土土器(図版14・33、付表6 44・45)

須恵器杯蓋・杯身(44)・高杯・甕・壺(45)土師器の甕が出土した。(45)は軟質気味で焼成が不良である。口縁部が大きく開き、球形状の体部を呈する特異なタイプである。他の共伴遺物から5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式~期TK-47型式に比定される。

流路1上面出土土器(図版14、付表6 46)

土師器高杯(46)はA3区流路1の上面の包含層から出土しており、近接する竪穴住居に関連する遺物とみられる。杯部上半部と脚部の一部を欠損している。杯部内面は密なハケ目調整、脚部の中位から裾部にもハケ目調整が残存する。

土壇1出土土器(図版14・33、付表6 47)

須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器甕・高杯(47)・甑が出土した。(47)は屈曲部は内弯して立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。脚部は高く、裾部は緩やかに広がる。調整は脚部に面取りがみられる。これらの土器類は5世紀末から6世紀前半にあたる期TK-23型式~期TK-47型式に比定される。

土壇2出土土器(図版14、付表6 48)

須恵器杯蓋・無蓋高杯(48)・甕、土師器甕・高杯・甑把手が出土している。(48)は外反する口縁部に2条の突帯と1対の耳を持ち、体部下半には波状文を配する。これらの土器類は5世紀後葉にあたる期TK-208型式に比定される。

溝7出土土器（図版14・33、付表6 51・52）

須恵器甕（51・52）・杯身・杯蓋・甕、土師器甕・高杯・甌などが出土している。図示した甕は5世紀末～6世紀前半にあたる 期TK-23型式～ 期TK-47型式に比定される。

竪穴住居9出土土器（図版15、付表7 53・74）

遺構の大半が調査区外で、出土遺物は少ない。

須恵器 杯身（53）は1/3程の破片で、底部は残らない。 期TK-23型式～ 期TK-47型式に比定される。

土製品 竈の支脚（74）は、口径10～12cm、残存器高9cmで、胎土には砂粒が多く含まれ、輪積みの痕跡が顕著に残る。北西辺に築かれた竈内から出土した。

竪穴住居11出土土器・石製品（図版15、付表8 54～58・石5）

総数255点の遺物が出土し、内容は土師器が89%、須恵器が11%である。

須恵器 杯蓋（54）・杯身（55・56）・有蓋高杯身（57）・高杯（58）などが出土した。54は竈の東部に掘られた土壌からほぼ完形で、55は床面から出土し、他は覆土からである。杯身の口径は9.0～10.3cmで、器高は4.7cm前後である。 期TK-23型式～ 期TK-47型式に比定される。

土師器 甕や高杯の破片が出土しているが、小片のため図示できるものはない。

石製品（石5）は長辺18.1cm、短辺10.8cmの砥石である。4面ともに使用痕が残る。

竪穴住居12出土土器（図版15、付表9 59～63）

総数194点の遺物が出土し、内容は土師器が83%、須恵器が17%である。

須恵器 杯蓋（59・60）・杯身（61～63）など、比較的多くの遺物が図示できた。杯蓋の口径は10.6～13.3cm、器高は4.0～5.4cmで、頂部が平坦なものと丸いものに分かれる。杯身は口径が9.9～11.0cm、器高は4.8～5.0cmと、まとまりをもつ。底部の調整は2/3程ロクロヘラケズリを行っている。 期TK-23型式～ 期TK-47型式に比定される。

土師器 甕の破片が出土しているが、小片のため図示できるものはない。

竪穴住居13出土土器（図版15、付表10 68）

総数260点の遺物が出土し、内容は土師器が88%、須恵器が12%である。

土師器（68）は高杯で、杯部の口径は15.2cm、器高は13.0cmである。スカート状に短く開く脚に杯が付く。口径は15.2cmで、内弯しながら立ち上がり、端部を上方につまみ上げ、口縁部とする。

竪穴住居14出土土器

総数206点の遺物が出土し、内容は土師器が86%、須恵器が14%である。いずれも小片のため図示できる遺物はない。

竪穴住居15出土土器・石製品（図版15、付表11 64～67・石6）

総数120点の遺物が出土し、内容は土師器が77%、須恵器が23%である。

須恵器 杯蓋（64・65）・杯身（66・67）がある。杯蓋は器高が2.8cmのものと、深い4.1cmのものがある。杯身は混入した古い時期の（67）と当該期の製品である（66）がある。 期TK-

209型式に比定されるものが主体である。

石製品 砥石(石6)は、長辺27.6cm、短辺13.5cmで、変成岩製で大型である。1面だけが使われているが、その痕跡は少ない。

溝12出土土器(図版15、付表12 69・70)

須恵器 杯蓋(69)と有蓋高杯身(70)が出土した。須恵器は、期TK-47型式のものを図示したが、より新しい期TK-209型式に比定されるものもあり、期に並行する時期の遺構である。

B1区遺物包含層出土土器(図版15、付表13 71~73)

須恵器 杯蓋(71)と杯身(72・73)がある。須恵器には、期TK-47型式に比定されるものと、期TK-209型式の、両型式がある。

(2) 長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には、B6区井戸1内の最下層から出土した一括遺物がある。また井戸1の井

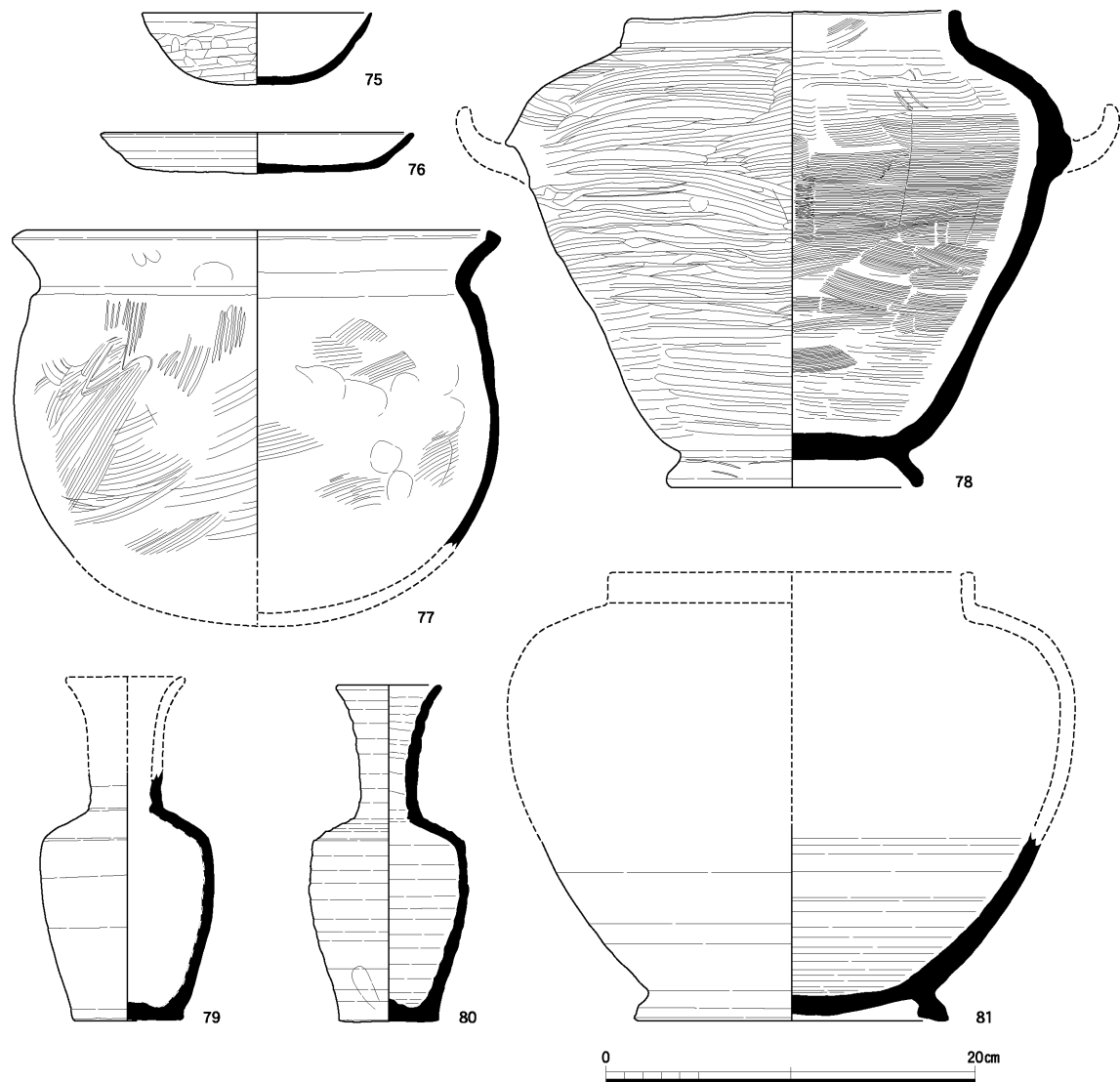


図16 井戸1出土土器実測図(1:4)

戸側縦板材・太柄も図示した。A 7・8区一条大路南側溝から当該期の遺物と車軸受け金具とみられる鉄製品が出土している。その他、土器類は遺物包含層からの出土もみられる。なお、この項における出土土器の時期編年は、平安京・京都⁵⁾～ 戴期編年案に準拠する。土器の器形とタイプの名称は、奈良国立文化財研究所の用例による。

井戸 1 出土土器 (図版34、図16、付表14 75～81)

木枠内の最下層から出土しており、平安京 期中に比定される一括遺物である。

土師器 椀 A (75) は口径13.0cm、器高4.1cm。外面はヘラケズリを施す。一部ケズリ残しが見られる。皿 A (76) は赤褐色の胎土を有し、内面と口縁部は火を受け煤が付着している。外面はナデ調整されケズリは施されない。形態は口縁部が大きく開き、上端に端面を持つ。その特徴から摂津産とみられる。甕 (77) は口径25cm程、器高は下半部欠損のため不明である。口縁部は体部から屈曲し、端部は上方につまみ上げられる。体部外面上方に縦方向のハケを施す。中位以下は斜方向のハケを施す。口縁部は内面頸部下端より外面にかけナデ調整を施す。体部内面は斜方向の粗いハケとオサエを施す。短頸壺 (78) は欠損しているが、向かい合う2方向に把手を有する壺である。形態は腰に張りを持って立ち上がり、把手部で最大径を測り屈曲する。口縁部は短く内傾する。高台は「八」字状に大きく張り出す貼付け高台である。調整は外面をケズリ後に緻密なミガキを体部全体に施す。内面には緻密なハケメが底部から口縁部直下まで施される。

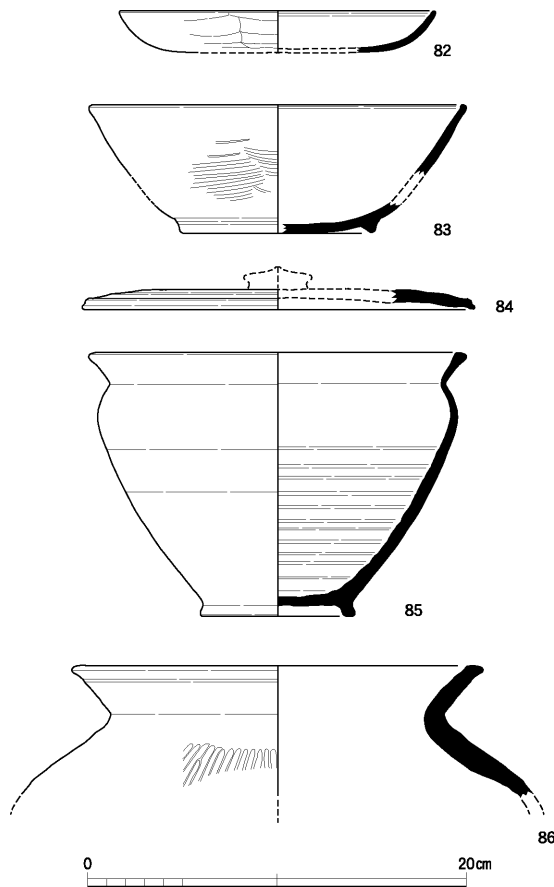


図17 溝 1 出土土器実測図 (1 : 4)

須恵器 壺 G は肩が丸みを持って体部がやや膨らむタイプ (79)、肩が張り体部が直線的なタイプ (80) がある。(79) の頸部は欠損しているが (80) と同じく、頸部は長く延び、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。平底の底部には糸切痕が残存する。壺 A (81) は下半部しか残存していないが復元し図示した。内面に自然釉が付着する東海系の壺である。淡灰色の密な胎土を有する。内弯しながら立ち上がり、肩部で丸く張りを持って屈曲し、直立する短い口縁部に至る。高台は断面が「八」字状の輪高台が貼り付けられる。外面高台内には墨が付着しており硯に転用されたと思われる。

溝 1 出土土器 (図版34、図17、付表15 82～86)

(86) は A 1・2 区、(82・83・85) は A 7・8 区、(84) が A 10～12 区のいずれも溝 1 から出土した。

土師器 皿 A (82) は口径16.8m、器高

2.3cm。外面調整はヘラケズリを施す。杯B（83）は体部は外上方に広がり、わずかに口縁部は外半する。丸みを持った逆台形状の高台が貼り付けられる。調整は外面をケズリ後にミガキを施す。

須恵器 蓋（84）は器高が極めて低く、扁平である。口径は20.5cm程になる。外面の口縁部際に重ね焼き痕跡が残存する。鉢（85）は口径19.0cm、器高13.9cm。肩の張る体部に「く」字状に屈曲する口縁部を持ち、底部には「八」字状の高台が付く。内面にロクロ目が顕著に残存する。甕（86）の口径は約21.8cm、下半部は欠損している。口縁部は外上方に伸び、口縁端部は平坦面を呈する。体部外面は平行叩き、内面には粗い充て道具の痕跡が残存する。

遺物包含層出土土器（図版34、図18、付表16 87～91）（87・89）はA 1・2区、（88）はA 4区、（90・91）はB 5区のいずれも遺物包含層から出土した。

土師器 椀A（87・88）は口径12.0～12.2cm程。器高は（88）が3.7cmを測る。どちらも外面調整はケズリを施す。磨滅が激しい。皿A（89）は口径16.4、器高2.7cm。外面調整はケズリを施す。磨滅が激しい。

須恵器 壺E（90）は口径11.1cm、器高は下半部欠損のため不明。丸くおさめた口縁部に蓋が付くタイプである。皿（91）は口径19.6cm、器高1.9cmを測る。平坦な底部から直線的に立ち上がる口縁部を持つ。口縁部上端は平坦面を呈する。

鉄製品（図19 金1）

鉄製車軸受け金具（金1） A 7・8区的一条大路南側溝（溝1）の東端の底部から出土した。全長4.5cm、残存幅4.8cm、厚さ0.7cmの円筒形で全体の約1/8が出土した。復元内径は約8.2cmであるが、内径の曲面は扁平で楕円形をしているようである。その外に長さ1.1cm、厚さ0.8cmの突起が1ヶ所つく。出土事例は長岡京内では2例あり、右京236次調査⁶⁾の平安時代頃の氾濫による溝から、幅5.7cm、内径約8.3cm、全体の約1/2が残存する軸受けが出土している。右京400次調査⁷⁾では大型の鞆羽口と共に鉄製の車軸受けが、幅5.4cm、内径約9.0cmで、約1/3残存して出土している。他に、平城京や神奈川県海老名本郷に出土例⁸⁾がみられる。

木製品（図20 木1・2）

井戸側材（木1・2） B 6区で検出した円形縦板組井戸（井戸1）

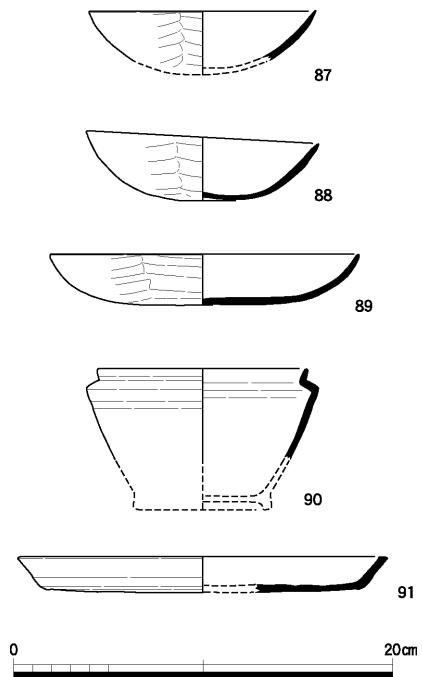


図18 遺物包含層出土土器実測図（1：4）

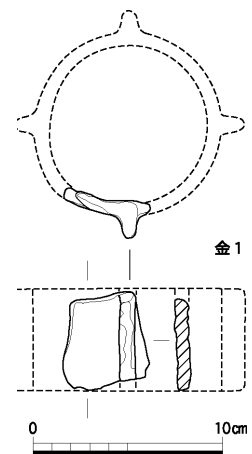


図19 鉄製車軸受け金具実測図（1：4）・写真

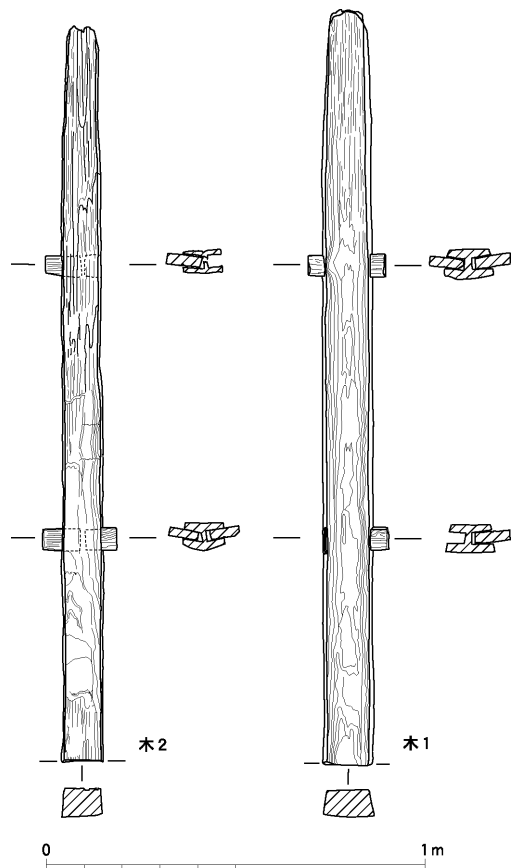


図20 井戸側材実測図(1:20)

の材で、20枚の板材を縦方向に組み、隣り合う板材に上下2ヶ所の柄穴をあけ、太柄でとめている。(木1)の残存長は2mで上部は腐植して欠けているが、下部の2/3は堅固な材である。また、井戸内径側の材の幅は11cm、外側の幅は13cm、厚さは8.5cmで、断面は台形状をしている。(木2)は残存1.95m、内幅9.5cm、外幅11cm、厚さ7cmで、他の材の幅は9~17cm、厚さは4~7cmある。井戸枠南半の2本は下部の0.8m、5本は1.4m残存しており、上部は切断された痕跡が残る。廃棄時に材を回収しようと試みたものと考えられる。

材の外側は年輪と似た曲線があり、太い材の年輪に沿って木取りを行い、井戸側の曲線を形作ったものとする。

(木1)の右側面は底面から0.6mと1.32mに、左側面は0.59mと1.31mの位置に2孔ずつ、計4孔の穴が穿たれている。穴の大きさは少しずつ異なるが、平均すると、縦6.0cm、横2.7cm、奥行き

4.5cmである。

太柄は平均すると縦6.0cm、横2.7cm、長さ(奥行き)9.3cmで、中央付近に縦方向の破線状の刻みがある。打ち込む深さの目印と考えられる。

註

- 1) 家根祥多「縄文土器から弥生土器へ 刻み目突帯文土器編年案」『縄文から弥生へ』 帝塚山考古学研究所 1984年
- 2) 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- 3) 山本輝雄「今里遺跡」『長岡京市史 資料編1』 長岡京市史編纂委員会 1991年
- 4) 3)に同じ。
- 5) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 「右京第236次調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』 1988年
- 7) 「右京第400次調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成4年度』 1994年
- 8) 合田芳正「いわゆる軸受け頭形鉄器について」『青山考古第7号』 1989年
古墳時代の出土須恵器については平安学園の萩本 勝氏から助言・指導をしていただいた。また鉄製車軸受けについては財団法人長岡京市埋蔵文化財センターの原 秀樹・山本輝雄の両氏に御教示を受けた。

4.まとめ

今回の調査では縄文時代から中世までの各時期の遺構・遺物が発見された。以下、時代順にその成果を要約する。

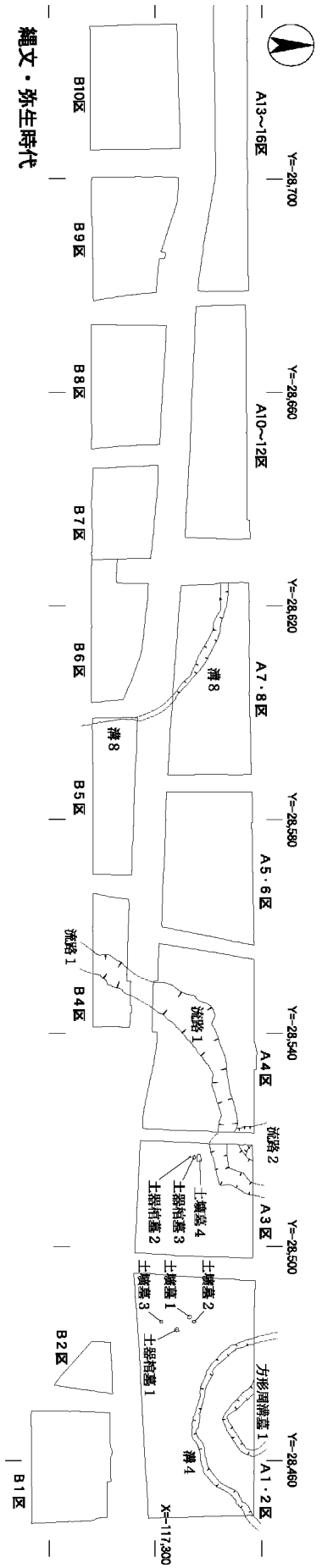
(1) 古墳時代以前

縄文時代から弥生時代 縄文時代の遺構は土器棺墓・土壙墓の発見がある。A1・2区の土器棺墓・土壙墓からは縄文時代晩期中頃から後半にあたる滋賀里式と船橋式の深鉢が出土している。またA3区では晩期末にあたる長原式の深鉢と壺が出土しており、墓地が長期的に営まれていたことが窺われる。検出地点は善峰川右岸の低位段丘の北斜面に位置するが、墓域の範囲は現状での特定は困難である。これに伴う集落は墓地を検出した周辺の段丘上面に営まれたと考えられる。近辺のこれまでの調査例をみると、上里遺跡では調査地の東を限る文化センター通りの南北道路で、縄文時代後期の土器と石匙を含む遺物包含層が確認されている¹⁾。また東の長岡第十小学校の調査でも後期の焼土壙が検出されている²⁾。調査地南の今里遺跡では、土器棺墓2から出土した壺と類似した晩期末の壺棺が出土している³⁾。今回の調査は井ノ内遺跡や今里遺跡と連なる小畑川右岸の縄文時代遺跡の動向を考える上で注目される。

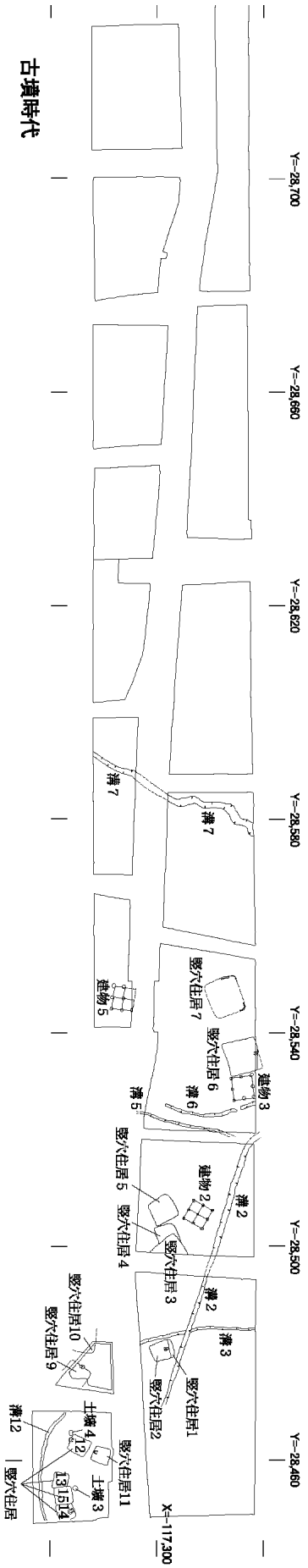
弥生時代は方形周溝墓と溝そして流路がある。墓域の範囲は不明であるが、方形周溝墓の検出は、当地点が弥生時代にも墓域であったことを窺わせる。その広がりも今後の課題となるが、周溝墓の周りを巡る溝については、区画溝の可能性も考えられる。また流路を挟んで西側で検出した溝8も類似した性格が考えられる。そのことから区画溝以南には集落の存在が予想できる。上里遺跡では、調査地の南東にあたる文化センター通り沿いの宅地内の調査で、溝内から弥生時代中期後葉の一括遺物が出土し、周辺一帯に集落の存在が考えられている⁴⁾。そのことは今回の墓域との関係を考える上で興味深い。

古墳時代 集落内に営まれた竪穴住居15棟、掘立柱建物3棟、溝5条などの遺構がある。竪穴住居は方形ないしは長方形を呈し、一辺が3～5m規模のものと、一辺が6m以上のものがある。また竈をもつものが3棟で、支脚には石材を使用しているものと、支脚用に製作された円筒形の土製品とがある。掘立柱建物は3間×3間の倉庫とみられる総柱の建物2棟と、竪穴住居6と並ぶ2間×2間の建物があるが、いずれも小型建物である。それらで構成されたこの集落は、古墳時代中期にあたる5世紀末～6世紀前半を中心に営まれたことが、竪穴住居内からの出土遺物でわかる。溝3・5・6は排水施設とみられるが、南北方向の溝7と溝3そして東西方向の溝12は、集落を限る区画溝の可能性が高い。溝3と溝12は同一の溝で、この溝より東側は、一辺が3～5mの小規模な竪穴住居群で、溝7までの西側は一辺6m以上の竪穴住居群と倉庫からなり、何らかの意図的な配置関係が窺われる。

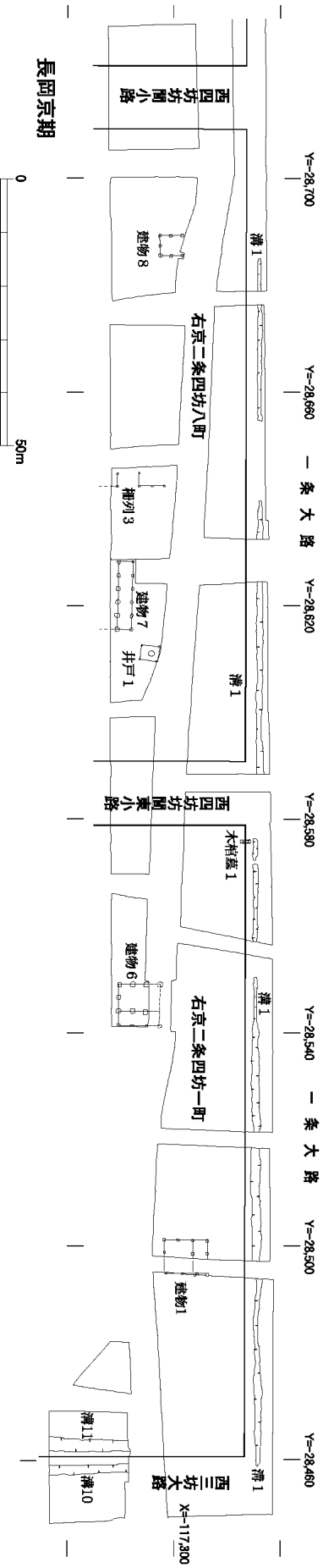
調査地の南西部に位置する芝古墳群は、西から東に向かってなだらかに傾斜する低位段丘に立地している。6世紀中頃～7世紀前半の首長墓とみられる前方後円墳である井ノ内車塚古墳のま



縄文・弥生時代



古墳時代



長岡京期

図21 (1:1,200) 圖說櫻川

わりに、小型の円墳・方墳が13基点在していたとされる群集墳である⁵⁾。集落のありかたについては、時期は異なるが古墳群との関係も視野に入れ、今後の大きな課題としておきたい。

(2) 長岡京期

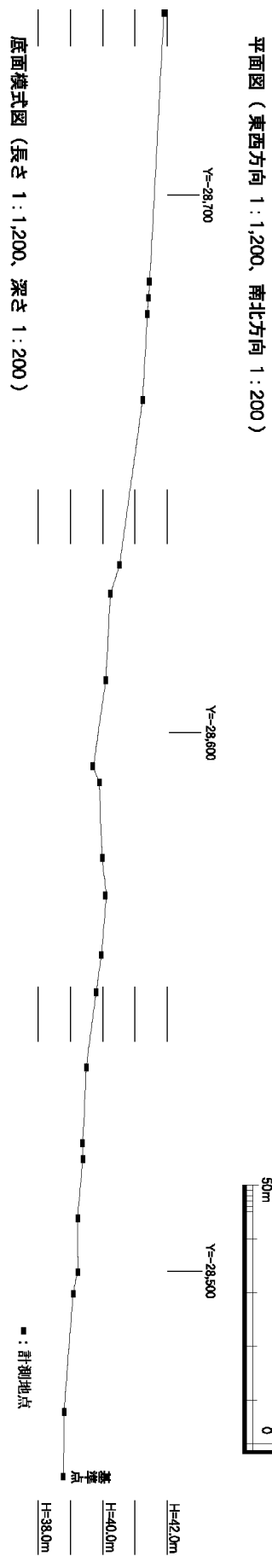
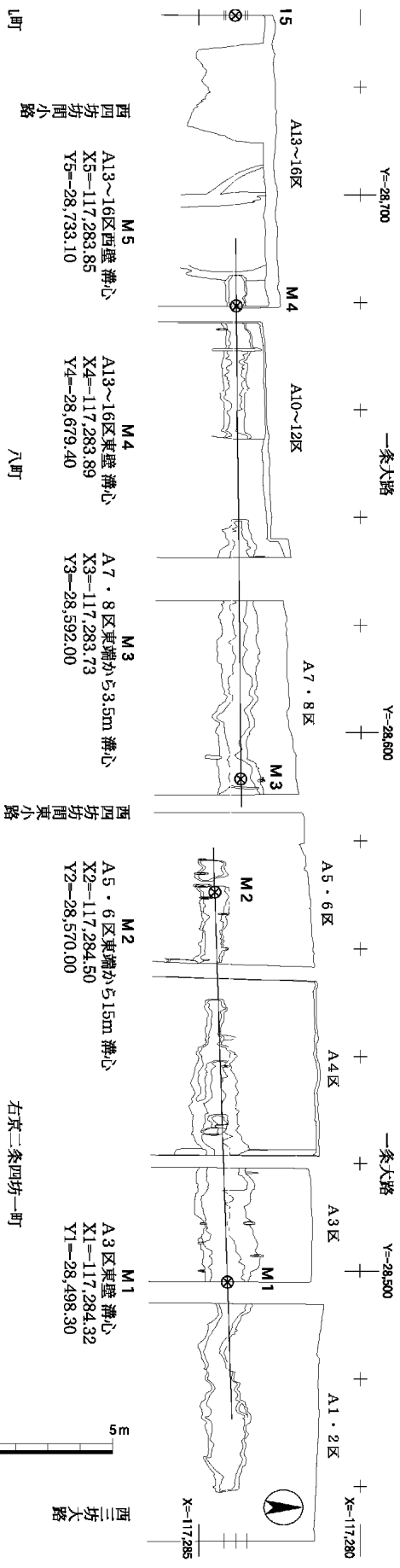
調査地が右京二条四坊一・八・九町跡に推定されることから、条坊関連遺構と宅地内の建物の存在が予想された。一条大路については、従来の推定線より南で、東西約270mにわたって検出した溝1を一条大路南側溝と考えた。左京域では数例の検出例がある⁶⁾が、右京の北西域の調査例は少なく、一条大路は検出されていない。B1区では南北方向の西三坊大路西側溝と内溝を検出した。A1・2区では当初、西側溝を調査区東端部に推定していたが、B1区で検出したことにより、A区での有無を確認するため、A1・2区南壁面を再調査し、当溝の痕跡を検出した。これらの条坊遺構の検出により、長岡京北西域の条坊を復元する上で重要な定線となった。さらに建物群や井戸の検出は町内の宅地利用を示す重要な成果である。しかし西四坊坊間小路と西四坊坊間東小路などの南北道路については、今回の調査では検出できなかったことから課題は残る。

ここでは検出した一条大路南側溝と西三坊大路西側溝・内溝からこの付近の条坊を推定し、建物や井戸の配置を考えた。1丈を2.96mとして大路は幅10丈(29.6m)、小路は幅4丈(11.84m)、一町の幅は二条大路以北で東西40丈(118.4m)、南北35丈(103.6m)⁷⁾で作図した。今回の調査では従来の一条大路推定線より数メートル南で東西溝1を検出した。最大幅1.7m、最深0.35mで、ほぼ東方へ低くなっていた。一部削平されていたが、全長約270mにおよぶ。また、南北通りの西三坊大路が当初、調査区東端に推定されていたが、推定より数メートル西側で2条の南北溝を検出した。東側の溝は幅約2m、深さ0.15~0.30m、西側の溝は幅2.5~3.0m、深さ約0.2mであった。どちらも緩やかに北方へ低くなる。2条の南北溝を西三坊大路の西側溝と内溝とすると、築地線はその中間点でおおよそ $Y=-28,460.6$ となる。条坊の1町は東西40丈、小路幅は4丈であることから、西三坊大路西築地心から西に40丈(118.4m)、44丈(130.24m)、84丈(248.64m)、88丈(260.48m)として、西四坊坊間東小路、西四坊坊間小路の東西築地心の推定線とした。

右京二条四坊一町にあたるA1・2区とA3区では、建物1が町内東半部の北側に位置する。調査区外の南にも、さらに新たな建物も予想されることから町内北東部の一画を占める宅地が推測できる。西半部には東庇をもつ建物6が位置する。また町内北西隅では木棺墓を検出している。

右京二条四坊八町の北側の東半部にあたるB6区では建物7を検出した。東西の規模が5間の建物の北底部を検出しており、身舎は調査区外の南に延びる。今回の調査では最も大きな建物である。北東の近接地で検出した井戸1は、この建物に伴うものとみられる。西側のB7区では宅地の出入口とみられるL字状の柵列3が並ぶ。柵列3の以西にあたる西半部のB9区では、建物8を検出した。建物7とは別の宅地と考えられる。

最後に、廃都後の遺構としてA1・2区とB1区・B2区で平安時代の建物4棟と柵列を検出している。B2区では北端で中世の条里坪境に関連する東西溝と柵列を検出しており、新たな土地利用を示唆するものとして注目される。



数值一覧表

	A13~16区		A10~12区		A7・8区		A5・6区		A4区		A3区		A1・2区									
	M5地点	M4付近	M3地点	M2付近	M1地点	(基準点)																
Y座標 (m)	-28,733	-28,682	-28,679	-28,676	-28,660	-28,633	-28,624	-28,608	-28,592	-28,589	-28,575	-28,568	-28,557	-28,550	-28,536	-28,522	-28,519	-28,508	-28,498	-28,494	-28,472	-28,460
溝上端検出高 (m)	42.08	41.58	41.56	41.51	41.38	40.80	40.54	40.30	40.05	40.11	40.05	40.16	40.15	39.84	39.79	39.64	39.60	39.47	39.40	39.21	39.10	38.82
溝下端検出高 (m)	41.90	41.45	41.42	41.38	41.24	40.52	40.24	40.10	39.70	39.90	39.98	40.07	39.96	39.80	39.50	39.37	39.35	39.24	39.24	39.10	38.81	38.78
レベル位置	断面図	断面図	断面図	セリヤシ	断面図	断面図	断面図	セリヤシ	断面図	断面図	断面図	セリヤシ	断面図	断面図	断面図	断面図	断面図	セリヤシ	断面図	断面図	セリヤシ	断面図
溝深さ (m)	0.18	0.13	0.14	0.13	0.14	0.28	0.30	0.20	0.35	0.21	0.07	0.09	0.19	0.04	0.29	0.27	0.25	0.23	0.16	0.11	0.29	0.04
基準点溝下端からの高さ (m)	3.12	2.67	2.64	2.60	2.46	1.74	1.46	1.32	0.92	1.12	1.20	1.29	1.18	1.02	0.72	0.59	0.57	0.46	0.46	0.32	0.03	0.00
基準点からの距離距離 (m)	272	222	219	216	200	173	164	148	132	129	115	108	97	90	76	62	59	48	38	34	12	0
西壁との溝傾斜度 (%)	-	0.9	1.2	1.3	0.9	2.6	3.3	0.9	2.5	-5.7	-0.6	-1.3	1.0	2.3	2.1	0.9	0.8	1.0	0.0	3.5	1.3	0.0
トレンチ内・溝傾斜度 (%)		0.9			2.0		1.0				0.1			1.5			0.5				0.9	

図22 一条大路南側溝の位置と傾斜図 (横 1:1,200 縦 1:200)

一条大路南側溝について（図22）長岡京遷都により人工的に配置された当溝について、その位置と傾斜の関係の検討を通じて明らかになったことを概述する。A 1・2区からA 13～16区までの南側溝部分の平面図（東西方向1,200分の1、南北方向200分の1）と、底面模式図（長さ1,200分の1、深さ200分の1）を作成した（図22）。条坊推定線は上述したとおりである。検出した一条大路南側溝（以下側溝）は、A 1・2区のY=-28,460地点から西のA 3区へは、やや偏行している。A 3区からはほぼ直線で、次第に側溝底面は高くなりながらA 4区、A 5・6区へと続く。どちらの調査区も西端は検出されていない。側溝は西のA 7・8区の東側では底面が、A 5・6区の底面より低位で検出され、溝底面は次第に高くなりながらA 10～12区、A 13～16区の東壁に続いている。図22のように、残存状態の良好な側溝心の地点を東からM 1～M 5とした。残存状態の良好なA 3区のM 1地点（X1=-117,284.32、Y1=-28,498.30）と、ほぼ直線的なA 5・6区のM 2地点（X2=-117,284.50、Y2=-28,570.00）を結んだ直線の垂線は、北で8 38西へ振れている。また、A 7・8区のM 3地点（X3=-117,283.73、Y3=-28,592.00）とA 13～16区のM 4地点（X4=-117,283.89、Y4=-28,679.40）を結んだ直線の垂線は、北で6 18西へ振れている。A 13～16区西壁で、わずかに残る溝心をM 5地点（X5=-117,283.85、Y5=-28,733.10）とした。直線と考えていた溝が、隣り合うM 2地点とM 3地点では、0.77mの南北方向のずれがある。類似した事例は、左京六・七条三坊の調査で1丈以上のずれが認められている⁸⁾。一町と八町の側溝のずれは、施工の工人集団の違いや時期差が推測されるが、当時の測量精度の許容誤差とも考えられる。

また築地線は直線であると考えて、A 3区のM 1地点とA 13～16区のM 5地点の溝心を結んだ直線の垂線は、北で6 53東に振れており、この溝心から側溝幅0.5丈/2 + 犬行0.3丈 + 築地半0.3丈 = 0.85丈（2.516m）南に築地中心線⁹⁾があるものとして復元し作図している。検出した側溝の深さは全体としてみれば0.04～0.35mの残存状態で、その底面の標高は、西端Y=-28,733地点（M 5地点）では41.90m、東端Y=-28,460地点（基準点）で38.78mである。その地点間273mの水平距離で3.12mの標高差がある。その傾斜度は約1%である。しかし、溝のラインが南北方向に段違いになっているM 2地点とM 3地点では、溝底面も段違いになっており、A 7・8区のM 3地点付近では南北道路の側溝は検出していないことから、八町の側溝の流水は表面流出の状態である。また西三坊大路西側溝の底面の標高は最深で38.65mだが、その北側延長にあたる当溝の標高は38.78mと高い。このように排水経路、流出方法については課題が残る。雨水や洪水などによる表面流出についての京域内の処理については、右京域を流れる自然河川を活用した長岡京の排水計画がなされていたと言われている¹⁰⁾が、右京の北西域では溝だけにたよらず西高東低の地形を利用し、京内に取り込んだ自然河川への表面流下も考えられる。

註

- 1) 高橋美久二・奥村清一郎ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『京都府概報 1979』1979年
- 2) 岩崎 誠「乙訓地方の自然と遺跡（2）桂川右岸の弥生遺跡」『長岡京 29』1982年

- 3) 長岡京市教育委員会「長岡京市報告書 19」1986年
- 4) 3)と同じ
- 5) 梅原末治「乙訓今里の古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告 4』 1923年
堤圭三郎・高橋美久二「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『京都府概報 1968』 1968年
- 6) 辻 純一「長岡京条坊復原における一考察」『研究紀要』第1号 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7) 山中 章「第4章 長岡京時代 第2節 長岡京と古代宮都」『長岡京市史 本文編1』 長岡京市史編纂委員会 1996年
長岡京条坊復原図 財団法人向日市埋蔵文化財センター編 1999年
- 8) 「水垂遺跡・長岡京左京六・七条三坊」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊 1998年
- 9) 6)と同じ
- 10) 神吉和夫・神田 徹「わが国の古代都市の溝について 長岡京と平安京」『土木史研究 第15号』 1995年

付表1 土壙墓1・土器棺墓1～3出土縄文土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	縄文土器 深鉢	口径36.6 器高21.4以上	口縁端部から少し離れて1条の突帯が貼り付けられ、D字型の刻目が付けられている。	口縁部外面は横方向のナデ、体部外面は条痕が横・斜方向に残る。	土壙墓1出土。 滋賀里IV式。
2	縄文土器 深鉢	口径27.4 器高24.5以上	いわゆる砲弾型。口縁端部から少し離れて1条の突帯が貼り付けられ、D字型の刻目が付けられている。	口縁部外面は横方向のケズリ、体部外面は下から上にケズリ上げている。	土器棺墓1出土。 船橋式。
3	縄文土器 深鉢	口径36.8 器高20.0以上	口縁端部に接して1条の突帯を貼り付け、小さなO字型の刻目が付けられている。体部と口縁部の境目にも突帯を貼り付け、O字型の刻目が付けられている。	口縁部外面は横方向のナデ、体部などは不明。	土器棺墓3出土。 長原式。
4	縄文土器 壺	口径不明 器高20.1以上	口縁部は直立し、端部はやや外反し、外に開くタイプとみられる。	内外面とも磨滅し不明。	土器棺墓2出土。 長原式。

付表2 流路1出土弥生土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	弥生土器 壺	口径9.2 器高16.5	口縁部は外上方に延び、体部は球形に近い。底部は平底。	口縁部・体部上半の外面は縦方向のハケ目を、体部下半の外面は縦方向のタタキ目を施す。	畿内第V様式。

付表3 竪穴住居2出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
6	須恵器 杯蓋	口径13.2 器高5.2以上	天井部は高く丸みを持ち平坦か。口縁部は外弯気味に下がり、端部はわずかに内傾し凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	磨滅が激しい。天井外面回転ヘラケズリ調整痕あり。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：粗くやや軟質。1mm以下の長石、チャートを多く含む。焼成：不良。残存：1/6。合成復元。天井中央部欠損。
7	須恵器 杯蓋	口径12.4 器高3.5以上	天井部は平坦気味か。口縁部は外弯気味に下がり、端部はわずかに内傾し凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	磨滅が激しい。天井外面回転ヘラケズリ調整痕あり。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡橙色。胎土：粗く軟質。1mm以下の長石、チャートを多く含む。焼成：不良。残存：1/6。合成復元。天井中央部欠損。
8	須恵器 杯蓋	口径12.0 器高4.0以上	天井部高く平坦気味。口縁部は凹凸気味に下がり、外端部は外に摘み出される。天井部との境に短くてシャープな稜を持つ。	天井部外面にカキ目調整、他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/4弱。反転復元。天井中央部欠損。
9	須恵器 杯蓋	口径12.5	口縁部は外弯気味に下がり、端部はわずかに内傾、凹面をなし肥厚。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面回転ヘラケズリ調整痕あり。他は回転ナデ調整。天井部欠損。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：1/6。合成復元。天井中央部欠損。
10	須恵器 杯蓋	口径11.7 器高4.8	天井部は高く丸みを持ち、頂部は平坦。口縁部は垂直気味に下がり。端部は内傾、凹面をなす。天井部との境に短く丸みのある稜を持つ。	天井外面1/2強、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
11	須恵器 杯蓋	口径11.3 器高4.6以上	天井部は高く丸みを持ち、頂部は平坦。口縁部は垂直気味に下がり。端部は内傾、凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面1/2強、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：やや粗く硬質。1mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：1/4弱。反転復元。
12	須恵器 杯蓋	口径11.8 器高4.3	天井部はやや高く丸みを持つ。口縁部は広がり気味に下がり肥厚。端部は丸くおさまる。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面1/2強、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：密で硬質。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。
13	須恵器 杯蓋	口径12.4 器高5.0以上	天井部は高く丸みを持つ。口縁部は緩やかに下がり。端部は内傾、凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/2。合成復元。
14	須恵器 杯蓋	口径13.2 器高5.2以上	天井部は高く丸みを持つ。口縁部は垂直気味に下がり。端部は外半しわずかに凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	磨滅が激しい。天井外面2/3に回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：粗く軟質。1mm以下の長石、チャートを多く含む。焼成：不良。残存：1/4。合成復元。
15	須恵器 杯身	口径10.2 器高4.5以上 立上がり1.8	立ち上がり、やや高く内傾、中位で屈曲上方に至る。端面わずかに内傾し凹面をなす。受部は外上方に上がり気味で丸みを持つ。	底部外面3/5、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。底部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石、チャートを若干含む。焼成：良好。残存：1/4弱。反転復元。
16	須恵器 杯身	口径10.8 器高4.0以上 立上がり高1.7	立ち上がり、やや高く内傾して上方に至る。端面わずかに内傾し凹面をなす。受部は外上方に上がり気味で丸みを持つ。	底部外面回転ヘラケズリ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：密でやや軟質。0.5mm以下の長石を若干含む。焼成：不良。残存：1/4。反転復元。
17	須恵器 杯身	口径9.2 器高4.8 立上がり高1.6	立ち上がり、やや高く内傾して上方に至る。端面わずかに内傾し凹面をなしシャープ。受部は外上方に上がり気味で丸みを持つ。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
18	須恵器 杯身	口径10.2 器高5.5 立上がり高1.7	(10)と同じ形態で底体部丸みを持つ。	底部外面2/3、粗い回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：粗く軟質。1mm以下の長石を若干含チャートを含む。焼成：不良。残存：1/3。反転復元。
19	須恵器 杯身	口径10.3 器高5.7 立上がり高2.2	立ち上がり高く内傾して長く伸びる。端面は丸くおさめ、受部は外上方に上がり気味に、丸くおさまる。底体部は深く底部は平坦気味。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰色。胎土：粗く軟質。2mm以下の長石、チャート、砂粒を多く含む。焼成：不好。残存：2/3。合成復元。
20 (19)	須恵器 杯身	口径10.3 器高5.7 立上がり高1.6	(12)と同じ形態でよりシャープさが強い。	底部外面1/2強、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
21	須恵器 甕	口径10.2 器高11.0	口頸部から大きく外反、中位で内弯して口縁部に至る。口縁外面の中位に凸帯を持ち、以下に2段の波状文を配置する。口縁端面は凹面をなす。体部は球形で底部は丸底。体部中位に円孔を穿つ。	体部中位をカキ目調整。下半を回転ヘラケズリ調整、最底部ナデ調整。他は回転ナデ調整。	色調：淡灰色。胎土：粗く硬質。0.5mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：1/6。反転復元。

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
22	須恵器 把手付椀	口径8.7 器高6.6	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反気味に上方に伸び、端部はやや内へ立ち上がる。体部上方に2条の突帯、下方に1条の突帯を持ち、間に波状文を配する。	下方の突帯以下は静止ヘラケズリ。他は回転ナデ調整。	色調：青灰色。胎土：密。1mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。残存：把手を除きほぼ完形。合成復元。
23	須恵器 無蓋高杯	口径14.5	底部は深みを持ち、口縁部は外反気味に外上方に伸びる。体部外面に2条の突帯を持ち以下に波状文を配置する。脚部には四方透かし窓を穿つ。	杯部外面下半部を回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：暗緑灰色。胎土：密で硬質。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。脚部は欠損。
24	須恵器 無蓋高杯	口径13.2	杯蓋を逆転させたような形態の杯部で口縁部が外反して大きく開く。口縁部下方に突帯を持つ。	杯部外面口縁部除き回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：1/3。合成復元。脚部は欠損。
25	土師器 甕	口径14.0 器高6.0以上	口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くおさまる。	磨滅著しく不明。	
26	土師器 甕	口径14.7 器高12.0以上	球状の体部に「く」字状に外反する口縁部。	体部外面はハケ目、内面はケズリが施される。	
27	土師器 甌	口径24.4 器高7.0以上	体部上半は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや内傾する。	磨滅著しく不明。	
28	土師器 甌	口径24.8 器高16.0以上	体部上半は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。	磨滅著しく不明。	
29	土製 把手	長さ5.0 厚さ2.3	彎曲し、端部は上方に伸び丸くおさめる。	磨滅著しく不明。	
30	土製 支脚	直径約10.0 長さ11.0以上	楕円形で、上下の径は異なる。	輪積みの痕跡が残る。	

付表4 竪穴住居6出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
31	須恵器 高杯蓋	口径12.3 器高5.6	天井部は高く丸みを持つ。中央部につまみを貼り付ける。口縁部はなだらかに下がり、緩い凹凸持つ。端部内傾し凹面をなす。口縁部との境にシャープな稜を持つ。	天井外面(つまみを除き)回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：やや粗く硬質。0.5mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。
32	須恵器 高杯蓋	口径12.3 器高5.2	天井部はやや高く丸みを持つ。中央部に天井部が凹むつまみを貼り付ける。口縁部はなだらかに下がり、端部内傾し凹面をなす。口縁部との境にシャープな稜を持つ。	天井外面1/2(つまみを除き)回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：やや粗く硬質。0.5mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
33	須恵器 高杯蓋	不明	天井部の下がり口まで回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。天井部以下は欠損。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：密で硬質。0.5mm以下のチャートを含む。焼成：良好。残存：天井部のみ1/4残存。
34	須恵器 杯蓋	口径12.2 器高3.2以上	口縁部はなだらかに下がり。端部内傾し凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。頂部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：密で硬質。1.0mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：1/4弱。反転復元。
35	須恵器 杯蓋	口径12.0 器高4.6	天井部はやや高く丸みを持ち、頂部は平坦。口縁部はなだらかに下がり。端部平坦気味で、わずかに凹面をなし肥厚。口縁部との境にわずかな稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。0.5mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。
36	須恵器 杯蓋	口径12.5 器高4.4以上	天井部は比較的高くわずかに丸みをもつ。口縁部は垂直気味に下がり。端部わずかに内傾し凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。頂部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：淡青灰色。胎土：やや粗くて軟質。0.5mm以下の長石、チャートを含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。
37	須恵器 杯蓋	口径12.5 器高4.0以上	天井部は比較的高くわずかに丸みをもつ。口縁部は垂直気味に下がり。端部内傾し凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。頂部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：やや粗く硬質。1.0mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：1/4弱。反転復元。
38	須恵器 杯身	口径10.0 器高4.7 立上がり1.9	立ち上がりやや高く内傾し内上方へ伸びる。端面は内傾し凹面をなす。受部は上方上がり気味に丸くおさまる。底体部はやや深く、底部はやや平坦。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。底部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：淡灰色。胎土：やや粗く、軟質。0.1mm以下の長石、チャート含む。焼成：良好。残存：ほぼ完形。反転復元。
39	須恵器 甕	口径18.0 器高不明	口縁部外反し外上方に伸びる。端部下端に突帯が巡る。	口縁部内外面回転ナデ。体部内面タタキ後にスリケシが見られる。	色調：暗青灰色。胎土：密で硬質。0.1mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：口縁部1/3。反転復元。肩部欠損。体部肩部以下欠損。

付表5 竪穴住居7出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
40	須恵器 杯蓋	口径12.6 器高4.7以上	天井部は高く、丸みをもつ。口縁部は垂直気味に下がり。端部ほぼ平坦気味で、わずかに凹面をなす。天井部との境に短い稜を持つ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。頂部欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：暗青灰色。胎土：密で硬質。0.5mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：口縁部1/3。反転復元。
41	須恵器 杯身	口径9.8 器高4.5以上 立上がり1.9	立ち上がりやや高く内傾し内上方へ伸びる。端面は丸くおさまる。受部は水平に丸くおさまる。底体部はやや深く、底部は平坦。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。内面中央部に仕上げナデ。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。焼成：良好。残存：1/3弱。反転復元。

付表6 溝2・3・7、土壌1・2、流路1上面出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
42	須恵器 杯身	口径10.5 器高4.1 立上がり1.6	立ち上がりやや高く内傾し中位で屈曲して上方へ伸びる。端内傾し凹面をなす。受部は上外方に上がり気味でシャープ。底体部は平坦。	底部外面3/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。遺構：溝2。
43	須恵器 甗	口径不明 器高8.3以上	口頸部は基部は細い。最大径は体部の中位上方に求める球形を呈する。底部は丸底。体部中位に円孔を穿ち、沈線が巡る。	体部上半部、回転ナデ調整。下半部はスリケシ状のナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡青灰色。胎土：やや粗く、軟質気味0.5mm以下のチャート、長石含む。焼成：不良。残存：1/2。反転復元。遺構：溝2。
44	須恵器 杯身	口径11.0 器高4.6以上 立上がり1.8	立ち上がりやや高く内傾しながら上方に凹凸部を持ち伸びる。端部は内傾し凹面をなす。受け部は水平。	底部外面、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。底部は欠損。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：密で硬質。1.0mm以下の長石含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。遺構：溝3。
45	須恵器 広口壺	口径14.6 器高不明	口縁部はきつく外反し外上方に伸びる。端部は隅丸の方形で外端面にわずかに凹面をなす。体部は球形。	内面肩部から外面体部上半部まで回転ナデ。内面体部コテナデ。押圧痕跡あり。	色調：淡青灰色。胎土：やや粗く軟質。0.5mm以下の石英、長石などを多く含む。焼成：不良。残存：上半部1/2強。合成復元。遺構：溝3。
46	土師器 高杯	口径不明 器高8.0以上	脚部の裾はなだらかに外へ広がる。	杯部内面は密なハケ目。脚部外面と裾部はハケ目調整。	遺構：流路1上面。
47	土師器 高杯	口径14.8 器高17.0	内弯する深い受部と、小さい裾広がり脚部。	脚部は下から上へのケズリ。裾部は横方向のケズリ調整。	遺構：土壌1。
48	須恵器 無蓋高杯	口径17.1 器高不明	底部は深みを持ち、口縁部は外反気味に外上方に伸びる。体部外面に2条の突帯を持ち、突帯上に把手を持つ。突帯以下に波状文を配置。脚部には透かし窓を穿つものか。	杯部外面下半部を回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。脚部は欠損。	ロクロ回転：右方向。色調：淡青灰色。胎土：やや粗く硬質。0.5mm以下のチャート、長石などを若干含む。焼成：良好。残存：杯部1/3。反転復元。遺構：土壌2。
49	須恵器 甗	口径15.2 器高不明	口縁部外反し外上方に伸びる。端部は丸くおさまる。口頸部外面上方に雑な波状文を配する。	口縁部回転ナデ。頸部下半部ハケ目調整後ナデ。体部には外面はタタキを施す。内面はナデ。肩部以下欠損。	色調：淡青灰色。胎土：粗く軟質。1.0mm以下の長石などを多く含む。焼成：良好。残存：上半部1/6。合成復元。遺構：溝2。
50	須恵器 甗	口径21.6 器高不明	口縁部外反し外上方に伸びる。端部は扁平な玉縁状。口縁部は歪みあり。	口縁部回転ナデ。体部内面青海波タタキ。外面格子目状のタタキ。	色調：淡青灰色。胎土：粗く硬質。3.0mm以下チャートを多く含む。焼成：不良。残存：口縁部1/2弱。反転復元。遺構：溝2。
51	須恵器 甗	口径10.4 器高不明	口縁部外反し外上方に伸びる。端部は上下に伸び中央に突帯が巡る。口頸部外面中央に突帯が巡る。その間に波状文を配す。	口縁部回転ナデ。体部内面タタキ後にスリケシ。外面平行タタキ。	色調：青灰色。胎土：粗く軟質。1.0mm以下の長石などを多く含む。焼成：良好。残存：上半部1/6。合成復元。遺構：溝7。
52	須恵器 甗	口径21.0 器高不明	口縁部外反し外上方に伸びる。端部は丸くおさまる三角形状を呈する。	口縁部回転ナデ。体部内面タタキ後にスリケシ。外面格子目状のタタキ。	色調：淡青灰色。胎土：粗く軟質。3.0mm以下チャート、砂岩を多く含む。焼成：不良。残存：口縁部1/2弱。反転復元。遺構：溝7。

付表7 竪穴住居9出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
53	須恵器 杯身	口径9.4 器高3.6以上	立ち上がりは内傾し、直線的で、端部は丸く納める。受け部はにぶく、短い。	体部下半は回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/5
74	土製 支脚	直径約12 器高不明	楕円形で、上下の径も異なる。	幅2cmほどの粘土紐を巻き上げて整形している。内面には補強の粘土もある。	胎土には長石、チャートなどの砂粒を多く含む。色調：赤褐色

付表8 竪穴住居11出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
54	須恵器 杯蓋	口径12.5 器高4.7	丸い頂部から短い稜を造り、まっすぐ端部に至る。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：暗灰色。胎土：砂粒を含む。焼成：甘い。残存：2/3。
55	須恵器 杯身	口径9.0 器高4.6	立ち上がりはわずかに外反し、内傾する端部に至る。器壁は薄く、端正に仕上げている。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗灰色。胎土：砂粒を含む。焼成：良好。残存：1/8。
56	須恵器 杯身	口径10.3 器高4.8	立ち上がり部は内傾し、端部は凹む。底部はわずかに丸い。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：灰色。胎土：砂粒を含む。焼成：良好。残存：1/2弱。
57	須恵器 有蓋高杯身	口径10.5 器高6.4	立ち上がりは内傾し、中位で真上に立ち上がり、端部は内傾し、凹む。脚は短く開き、4個の透かし穴がある。	底部は1/2強ほど回転ヘラケズリ調整し、脚を付ける。脚端部はなめらかで使用痕と推定される。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：砂粒を少量含む。焼成：良好。残存：1/2。
58	須恵器 高杯	脚部径10.8 器高不明	脚部はやや開き、端部は直立する。	回転ナデ調整。	色調：灰青色。胎土：砂粒を含む。焼成：良好。残存：1/8。

付表9 竪穴住居12出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
59	須恵器 杯蓋	口径10.6 器高4.0	天井部は平坦である。口縁部は垂直に下がり、端部はわずかに内傾し、凹面をなす。天井部との境に短い稜をもつ。	天井外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：明青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/5弱。反転復元。
60	須恵器 杯蓋	口径13.3 器高5.4	天井部は丸く、口縁部はほぼ垂直に下がり、端部は内傾し、凹む。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：外面暗灰色。内面赤灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/5。反転復元。
61	須恵器 杯身	口径10.0 器高4.8	受け部から内傾して立ち上がり、中位から上に伸びる。受け部は短く、体・底部は丸い。端部は凹む。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。器壁は薄い。	ロクロ回転：左方向。色調：暗静灰色。胎土：砂粒を含む。焼成：硬質。残存：1/4。
62	須恵器 杯身	口径9.9 器高4.8	立ち上がりは内傾し、中位で真上に伸びる。端部は凹む。	体・底部2/3程、回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：暗青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。
63	須恵器 杯身	口径11.0 器高5.0	立ち上がりはやや内傾し、端部に至る。端面は丸くおさめる。体部から底部はわずかに丸い。	底部外面2/3、回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：2/3弱。

付表10 竪穴住居13出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
68	土師器 高杯	口径15.2 器高13.0	円柱状で端部がスカート状に開く脚に、やや深い杯が乗る。端部はつまみ上げる。	脚や杯はナデ調整する。肌が荒れて細かな観察はできない。	色調：淡褐色。胎土：砂粒を多く含む。焼成：甘い。残存：1/2。

付表11 竪穴住居15出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
64	須恵器 杯蓋	口径12.9 器高2.8	やや丸い天井部から開きながら、丸くおさめた端部に至る。天井部との稜は存在しない。	天井部は回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/8。反転復元。
65	須恵器 杯蓋	口径14.8 器高4.1	やや丸い天井部から開きながら、丸くおさめた端部に至る。天井部との稜は存在しない。	天井部は回転ヘラケズリ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：2/3。
66	須恵器 杯身	口径12.9 器高3.7	口頸部は内傾しながら短く立ち上がる。端部は細く、丸くおさめる。	体・底部の1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良。残存：2/3。
67	須恵器 杯身	口径12.4 器高4.4以上	短い受け部から端部が上方に伸びる。端部は内傾し、凹む。	底部と体部の2/3は回転ヘラケズリする。器壁が薄い。	ロクロ回転：左方向。色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/8。

付表12 溝12出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
69	須恵器 杯蓋	口径10.8 器高3.4以上	天井部はわずかに丸く、端部はやや開きながら至る。端部は内傾する。	残存部は回転ナデ調整。	色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/10。合成復元。
70	須恵器 有蓋高杯身	底径9.8 器高5.0以上	脚部はスカート状に開き、端部はつまんで、細く仕上げる。透かし穴は径1.1cmで、2個である。	脚部は回転ナデ仕上げ。	色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存1/4。合成復元。

付表13 遺物包含層出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
71	須恵器 杯蓋	口径15.7 器高(3.8)	天井部から開きながら凹む端部に至る。	残存部に大半は回転ナデ調整。	色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/8。合成復元。
72	須恵器 杯身	口径13.6 器高(4.4)	受け部は短く、端部は内傾して立ち上がる。底部は平坦である。	底部の1/2は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。	ロクロ回転：右方向。色調：灰青色。胎土：粘質。焼成：良好。残存：1/7。合成復元。
73	須恵器 杯身	口径12.6 器高2.6以上	受け部から短い口縁部が内傾して伸びる。	体・底部の2/3は回転ヘラケズリする。	色調：青灰色。胎土：粘質。焼成：良好。残存1/8。

付表14 井戸1出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴
75	土師器 椀A I	口径13.0 器高4.1	口縁部は斜上方に広がり、端部は丸くおさまる。	口縁部外面の横ナデをケズリ残す。
76	土師器 皿A II	口径16.7 器高2.2	口縁部は大きく開き、端部はやや肥厚する。	外面はナデ調整。
77	土師器 甕	口径24.9 器高17.0以上	ほぼ球形の体部で、口縁部は屈曲し、端部は斜上方に延びる。	体部外面は縦方向のハケ調整。内面は斜方向のハケとオサエを残す。
78	土師器 短頸壺	口径17.6 器高25.8	腰の張った体部に把手を付ける。口縁端部は短く内傾する。	体部外面はケズリ後にミガキを全体に施す。内面は横方向のハケ調整。
79	須恵器 壺G	口径不明 器高14.0以上	頸部は欠損しているが、長く延び、口縁部は外反するタイプ。体部は肩部が丸く張る。	頸部・体部外面はロクロナデで、底部は糸切り痕が残る。
80	須恵器 壺G	口径5.4 器高78.2	体部は肩が張り、頸部は直立し、口縁部は外反し丸くおさまる。	口縁部・頸部・体部外面はロクロナデで、凹凸がめだつ。底部は糸切り痕が残る。
81	須恵器 壺A	口径不明 器高10.0以上	上半部は欠損しているが、口縁部が短く立ち上がる短頸壺。内湾する高台が付く。	体部内外面はロクロナデを施す。

付表15 溝1出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴
82	土師器 皿A II	口径16.8 器高2.3	口縁部は斜上方に延び、端部は丸くおさまる。	体部外面はヘラケズリ調整を施す。
83	土師器 杯B	口径22.4 器高7.0	体部は斜上方に延び、口縁部はやや外反し、端部は内へ肥厚する。	体部外面はケズリ後にミガキを施す。
84	須恵器 蓋	口径20.5 器高1.0以上	頂部は低く扁平で、宝珠つまみが付くタイプである。	縁部・内外面はロクロナデを施す。
85	須恵器 鉢	口径19.0 器高13.9	肩が張る体部に「く」字状に屈曲する口縁部。底部は「ハ」字状の高台。	体部内外面ともロクロナデを施す。
86	須恵器 甕	口径21.8 器高6.8以上	口縁部は体部から「く」字状に屈曲し、端部上面は平坦である。	体部外面は平行タタキが施されている。

付表16 遺物包含層出土土器観察表

No.	器種器形	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴
87	土師器 椀A II	口径12.0 器高3.0以上	口縁部は斜上方に延び、端部はやや尖り気味。	外面はケズリを施す。
88	土師器 椀A II	口径12.2 器高3.5	口縁部は斜上方に延び、端部はやや尖り気味。	外面はケズリを施す。磨滅著しい。
89	土師器 皿A II	口径16.4 器高2.7	口縁部は斜上方に延び、端部は丸くおさまる。	外面はケズリを施す。
90	須恵器 壺E	口径1.1 器高5.0以上	肩部が張り、短い口縁部が立ち上がり、端部は丸くおさまる。	口縁部・体部外面はロクロナデを施す。
91	須恵器 皿	口径19.2 器高1.9	体部は斜に直線的に延び、端部上面は平坦である。	体部内外面はロクロナデを施す。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょうにじょうしぼういち・はち・きゅうちょうあと、かみさといせき							
書名	長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-3							
編集者名	加納敬二・網 伸也							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのいわみちょう 大原野石見町 ちない 地内	26100	1047	34度 56分 32秒	135度 41分 09秒	2003年1月 6日～2003 年8月6日	約6,030m ²	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 上里遺跡	都城跡	縄文時代	土器棺墓、土壙墓	縄文土器		一条大路南側溝を 延長約270mにわ たり検出した。 西三坊大路西側溝 ・内溝を検出した。		
	集落跡	弥生時代	方形周溝墓、流路	弥生土器、石製品				
		古墳時代	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、土製品、石製品				
		長岡京期	一条大路南側溝、西三坊大路西側溝・内溝、木棺墓、掘立柱建物、溝、井戸、柵列	土師器、須恵器、鉄製品、木製品				
		平安時代	掘立柱建物					
	鎌倉時代～室町時代	溝、柵列	須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-3
長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡

発行日 2003年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961